

武梁祠帝舜図攷

—— 歴山、外養をめぐって ——

黒田 彰

一、武梁祠十帝図の帝舜図

二、帝舜図題記と越絶書

三、舜の物語の形成と孝子伝

四、史記における韓詩外伝の引用

五、史記の引用の問題

六、越絶書の解釈

孝子伝における舜の物語については、かつて論じたことがある（拙著『孝子伝の研究』〈佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年〉I四、『孝子伝図の研究』〈汲古書院、平成19年〉II一1など）。また、舜の図像が後漢から六朝にかけて多数、描かれていること、それらの殆どが孝子伝図であることも、そこで述べた。一方、孝子伝図で知られる後漢武氏祠画像石の武梁祠には、十帝図の中に舜の図像が描かれ、これまで十分に解釈されたことのない、難解な題記を伴う。

小稿は、武梁祠の帝舜図題記の出典が、越絶書であることを明らかにし、越絶書本文の注釈を試みることで、帝舜図題記の解釈を行おうとするものである。ところが、越絶書の本文がまた、極めて難解で、本題記の解釈は、古典研究における出典の問題、さらに出典本文の注釈と解釈との関係の問題などを、具体的に浮き彫りとする。小稿は、孝思想や、舜の物語の舞台となる歴山、外養という語などをめぐる諸課題を照明し、武梁祠帝舜図の題記内容に迫ろうとするものである。

孝子舜の物語の起こりは古い。舜は、三皇五帝と呼ばれる、古代中国の神話時代、五帝の第五（大戴礼記等）に数えられる人物で、その事跡は、神話伝説に彩られる。中国におけると同様、我が国の文学においても、舜の物語は注好選上46、太平記三十二、御伽草子『二十四孝』1などに祖述され、その文献は枚挙に遑がない。舜の物語の源流に溯つてゆくと、前漢、司馬遷の史記五帝本紀、劉向の列女伝11などが古来、書物としての名を轟かせるが、その源流の一として注意すべきものに、孝子伝がある。孝子伝は、六朝時代を中心に、十種以上のテキストが出現したが、それらの尽くが散逸し、現在完本の形で残るのは、我が国に伝わる陽明本、船橋本孝子伝の二本しかない。そして、両孝子伝の巻頭第一話には、舜の物語が置かれる。両孝子伝の内、圧倒的に古態を留めるのは、陽明本の方である。

さて、舜の物語について、文献に劣らず、豊富な資料を提供するものとして、漢代以来描き続けられた、孝子伝図がある。前述、陽明本孝子伝などは、隋以前に成立していたらしいが、例えばその第一話の舜の物語は、六世紀前半のボストン美術館蔵北魏石室、ミネアポリス美術館蔵北魏石棺、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺、C・T・

旧蔵北魏石床の孝子伝図中に描かれ、また、五世紀後半の北魏司馬金竜墓出土木板漆画図屏風、寧夏固原北魏墓漆棺画の孝子伝図中にも描かれることから、陽明本のそれが五、六世紀以前へと溯ることは、ほぼ確実であると思われる。中で、寧夏固原北魏墓漆棺画の舜の図像には、舜の物語における、極めて特異な要素である金銭のプロットが図像、榜題に明示され、また、陽明本に酷似した、金銭のプロットを有する、孝子伝本文（後掲、三教指帰成安注所引）の日本伝存が確認されることは、舜の物語の持つ問題の奥深さを、改めて印象付ける（陽明本にも金銭のプロットがあったらしいへ普通唱導集下末所引）。何故なら、寧夏固原北魏墓漆棺画の当該図像や榜題こそは、それらの孝子伝本文の成立が、五世紀以前へ溯ることを示す、確かな証拠と見られるからである。では、孝子伝の舜の物語は一体、その五世紀以前からはどれ位、成立を溯らせることができるのだろうか。

孝子伝図の舜の図像として目下、その現存の確認し得る最古の例は一九七一年、内蒙古和林格爾^{ホリンゴル}県新店子において発見された、和林格爾後漢壁画墓中室西、北壁第一層に描かれる、孝子伝図劈頭のそれである（榜題「舜」）。当墓は二世紀、一四〇—一七〇年間に作られたものだが、ほぼ同時代の二世紀半ばに作られた、世界的に名の知られる後漢

武氏祠画像石の武梁祠、全三石の第二層にも、孝子伝図が描かれている。だから、和林格爾後漢壁画墓や武梁祠の孝子伝図が描かれるに際しては当然、その粉本が存したであろうし、その粉本が作られるに当たっては、テキストとしての孝子伝——漢代孝子伝が既に存在したものと考えられるのだが、例えば前述、舜の物語の孝子伝本文と漢代孝子伝のそれとは一体、どのような関係にあるのだろうか。五世紀から二世紀までは、なお三百年以上の時間の隔たりが横たわっている。果して、現存する舜の物語の孝子伝本文は、その三百年の時を越え、後漢時代（二五—二二〇）の舜の図像の典拠とし得るのであるか。小稿は、武梁祠十帝図の舜図の題記を中心に、改めて舜の物語の孝子伝本文の成立に関し、検討を加えようとするものである。

まず武梁祠十帝図の舜図の位置と、孝子伝図との関連について、簡単に説明しておく。武梁祠の第一石一層には、次の十帝図が描かれている（右から。通し番号を付す）。

- 1 伏羲、女媧〔三皇〕
- 2 祝誦氏
- 3 神農氏
- 4 黄帝〔五帝〕
- 5 帝顓頊
- 6 帝喾

- 7 帝堯
- 8 帝舜
- 9 夏禹〔三后（の第二）〕
- 10 夏桀

その十帝図は、中国神話時代の三皇（1—3）五帝（4—8）及び、歴史時代の三后（三王とも。夏禹、殷湯、周文）の第一、夏の始めと終わりの王（9、10）を描いたもので、このような帝皇図が漢代に存したことは後漢、王延寿の魯靈光殿賦（文選十一所収）の一節に、

上紀開闢遂古之初、五竜比翼、人皇九頭。伏羲鱗身、女媧蛇軀。鴻荒朴略、厥狀睢盱。煥炳可觀、黃帝唐虞。軒冕以庸、衣裳有殊。下及三后姪妃乱主忠臣孝子列士貞女、賢愚成敗、靡不載叙。

（上は開闢遂古の初を紀し、五竜翼を比べ、人皇九頭なり。伏羲鱗身に、女媧蛇軀なり。鴻荒朴略として、厥の狀睢盱たり。煥炳として觀るべきは、黃帝唐虞なり。軒冕は庸を以つてし、衣裳は殊なる有り。下は三后姪妃乱主忠臣孝子列士貞女に及ぶまで、賢愚成敗は、載叙せざるなし）

と述べられていることから（鴻荒は、太古。睢盱は、見上げて目を見張る様。煥炳は、明らかなこと。軒冕は、車と冠。庸は、功績の意）、確かと言えるが、現存する遺品と

しては、武梁祠のそれ以外に類例がなく、また、謎も多い。例えばその三皇（1—3）は、礼号諡記（風俗通義一所引）にしか見えない、珍しい内容で（2祝融を、祝誦に作るのも特異）、各題記の出典も定かでない。それに対し、五帝（4—8）は、世本、大戴礼記六十二、史記等に見える、一般的な内容となっていて（但し、3帝嚳を、帝侖に作る）、5帝顓頊以下の四人を、黄帝の係累とする説に従う。また、黄帝に始まる五帝（4—8）の図像は、他の図像と異なり、冕冠と衣裳との統一的な姿に描かれていることが眼を引き、そのことは前引、魯靈光殿賦に、

煥炳可_レ觀、黃帝唐虞。軒冕以_レ庸、衣裳有_レ殊

とあることと明らかに関わり、それは黄帝以来、車服の制が定まったことを歌うと共に、靈光殿の五帝図の特徴を指摘するものとも考えられるのである。さて、5帝顓頊、6帝侖、7帝堯の題記も、世本また、大戴礼記、史記などによく一致する。ところが、小稿で取り上げようとする、8帝舜の題記は、そうでない。上記の三帝（5—7）とは違って、世本以下に關連する文言が見えないのである。小稿で取り上げる問題の一つが、その8帝舜図の題記の出典に關する問題である。

もう一つは、8帝舜図の題記と、孝子伝、孝子伝図との關連の問題である。例えば前述、和林格爾後漢壁畫墓中室

西、北壁第1層には、

1 舜

2 閔子騫

3 曾参

以下、全十三図に及ぶ孝子伝図が描かれる。また、武梁祠第一—三石第2層にも、

1 曾参

2 閔子騫

以下、全十七図に及ぶ孝子伝図が描かれている。そこに例えば村上英二氏藏後漢孝子伝図画像鏡（曾参、閔子騫の二図がある）などを考え併せると、

舜

閔子騫

曾参

以下に並ぶ、漢代孝子伝図の粉本、さらに漢代孝子伝テキストの存在が浮かび上がって来る。すると、漢代孝子伝、孝子伝図の筆頭には、舜の物語、図のあった可能性が、非常に高い（我が国伝存の兩孝子伝や、後の二十四孝の筆頭も、舜の物語である）。これらのことから、武梁祠十帝図中の8帝舜図は、単に十帝図の一図に留まらず、孝子伝図としての背景、意義をも兼ね備えていたことが、十分想定される。換言すれば、武梁祠の孝子伝図劈頭に、舜図があ

つても良かったし、ある筈だったが、適々先立つ十帝図中に同一のそれがあつたため、孝子伝図からはそれが省かれたものとも考えられる。このように武梁祠十帝図の帝舜図は、孝子伝図との関連において、大変興味深い問題を孕んでいる。そして、その帝舜図の題記が特異であることは前述の如く、問題の題記の出典を探つてゆくと、そこに孝子伝、孝子伝図の舜の物語の存在が浮かび上がつて来る。小稿は、その題記の出典と内容、孝子伝テキストとの関連を追究しようとする。

図一は、武梁祠第一石1層、十帝図の帝舜図を示したものである。^⑩ 図柄は、例えば『漢代武墓群石刻研究』五章一に、

次一人右向、戴冕、上衣下裳蔽膝、回首而顧、左手前伸（53頁）

とされる如くである（冕^{べん}は、冕冠で、天子の冠）。左側の題記を示せば、次の通りである。（一）内に、書き下し文を添える。

帝舜名重華、耕於歷山、外養三年



図一 武梁祠帝舜図

（帝舜名は重華、歷山に耕し、外養すること三年）

本句は、瞽中浴の漢武梁祠画像攷以来、史記五帝本紀の、

帝舜……名曰重華……舜耕歷山。歷山之人皆讓畔。

漁雷沢。雷沢上人皆讓居。陶河浜。河浜器皆不苦

窳。一年而所居成聚，二年成邑，三年成都

に基づくものとされ、このことは例えば近時の長廣敏雄氏

『漢代画像の研究』二部「武梁石室画像の図象学的解説」

の説明に至っても変わりが無い。重華の名は、舜の瞳が二

重になっていたことによるが（史記正義に、「目重瞳子、

故曰重華」と言う）、史記の「舜耕歷山」の句は（史

記には、この句が二度見える）、墨子二尚賢中（「古者舜耕

歷山」、韓非子十五難一（「歷山……舜往耕焉」、呂氏春

秋十四慎人六に、「舜耕於歷山」、淮南子一原道に、「舜

耕於歷山」、尚書虞書大禹謨（「帝初于歷山、往于田、

日号泣于旻天于父母」。偽古文とされ、その後半は、孟

子万章上に、「舜往于田、号泣于旻天」「舜往于田」

……号泣于旻天于父母」とある）等に見える、古い伝説

であり、本題記と史記とは、

・帝舜名重華、耕於歷山、外養三年（題記）

・帝舜……名曰重華……舜耕歷山……三年（史記）

の如く、——線部がよく一致するので、従来の通説も、それなりに説得力を持つものであった。例えば題記に言う、

「三年」は、史記に、

一年而所居成聚，二年成邑，三年成都

とする、舜の徳望を表わす年数となり、帝舜図（図一）の

画賛として十分、意味も通るように見えるのである。但し、

一つだけ疑問とすべきは、本題記の……線部に、

外養

という、耳慣れない二文字の残ることである。その「外

養」とは、家庭の外に出て生活するといった意味らしいが、

すると、題記の「三年」は、舜が歷山で耕した年数のこと

となり、史記の、「所居……三年成都」とは一寸、意味

がずれる。即ち、「外養」に注目すると、本題記は、舜が

家を出て、三年間歷山で生活したことを言うものらしく、

舜の物語には現に、そのことを詳しく記す説話も伝わって

いる。本題記をめぐってはかねてから、このことが気に掛

かっていたが、十年程前、題記の「外養」の語を含む、舜

の物語を記した、古い書物の伝存していることに気が付い

た。それが越絶書卷三、越絶呉内伝四のそれである。小稿

で改めて検討してみたいのは、本題記と越絶書の関係、及

び、その背景に浮かび上がる、孝子伝の舜の物語との関連

のことである。

越絶書も、謎の多い本である。作者は、春秋時代の子貢、伍子胥と言われ（越絶外伝本事一に、「或以爲子貢所作」、「一説蓋是子胥所作也」とある）、後漢の袁康、呉平ともされるが（四庫全書總目提要66・22。明、楊慎の説に基づく）、定かでない。書名の「絶」字なども、絶筆その他の説があつて、明らかでなく、分からないことの多い書物である。武梁祠の五帝図、舜図の題記と関連する、越絶書卷三、越絶呉内伝四の本文を示せば、次の通りである（四部叢刊所収に拠る。出典に関わる、簡単な注へ本文右側の漢数字を付した。本文末尾に書き下しを添える）。

越絶書三越絶呉内伝四

堯有_二不慈之名_一。堯太子丹朱倨驕、懷_二禽獸之心_一。堯知_レ不_レ可用、退_二丹朱_一而以_二天下_一伝_レ舜。此之謂堯有_二不慈之名_一。

舜有_二不孝之行_一。舜親父佞母、母常殺_レ舜。舜去耕_二歷山_一、三年大熟。身自外養、父母皆飢。舜父頑、母嚚、兄狂、弟敖。舜求_レ爲_二変_レ心易_レ志_一。舜爲_二瞽瞍子_一也。瞽瞍欲_レ殺_レ舜、未_二嘗可_レ得_一。呼而使_レ之、未_二嘗不_レ在_レ側。此舜有_二不孝之行_一。舜用_二其仇_一而王_二天下者_一、言舜

父瞽瞍、用_二其後妻_一、常欲_レ殺_レ舜、舜不_レ爲_レ失_二孝行_一、天下称_レ之。堯聞_二其賢_一、遂以_二天下_一伝_レ之。此爲_レ王_二天下_一。仇者、舜後母也。

堯に不慈の名有り。堯の太子丹朱倨驕にして、禽獸の心を懷く。堯用ゆべからざるを知り、丹朱を退けて天下を以つて舜に伝ふ。此れを堯に不慈の名有りと謂う。舜に不孝の行有り。舜の親父佞母、母常に舜を殺さんとす。舜去りて歷山に耕すに、三年にして大熟す。身自外養し、父母は皆飢ゆ。舜の父は頑に、母は嚚に、兄は狂い、弟は敖る。舜は心を変え志を易えるを爲さんことを求む。舜は瞽瞍の子爲るなり、瞽瞍舜を殺さんと欲するも、未だ嘗て得べからず。呼びて之を使うに、未だ嘗て側に在らずんばあらず。此れ舜に不孝の行有り。舜其の仇を用つて天下に王たりとは、言わく舜の父瞽瞍、其の後妻を用いて、常に舜を殺さんと欲するに、舜は孝行を失うを爲さず、天下之を称す。堯其の賢を聞き、遂に天下を以つて之を伝ふ。此れ天下に王爲り。仇は、舜の後母なり。

注

一、呂氏春秋十一「當務」に、「以爲堯有_二不慈之名_一、舜有_二不孝之行_一」（舜有

不孝之行」の高誘注に、「詩云、娶妻如之何、必告父母。堯妻舜、舜遂不告而娶。故曰、有不孝之行也」とする。このことは、孟子万章上に見える(同十九拳難に、「人傷堯以不慈之名、舜以卑父之号と、莊子盜跖に、「堯不慈、舜不孝」、鶏冠子下世兵十二に、「舜有不孝、堯有不慈」、淮南子十三汜論に、「然堯有不慈之名、舜有卑父之謗」など）とある。

二、孟子万章上に、「丹朱之不肖……舜之相堯」、「堯以天下与舜」、史記五帝本紀に、「堯知子丹朱之不肖不足授天下。於是乃權授舜。授舜則天下得其利、而丹朱病。授丹朱則天下病、而丹朱得其利。堯曰、終不以天下之病而利一人。而卒授舜以天下」、晋、皇甫謐の帝王世紀(太平御覧八〇所引)に、「堯取散宜氏女、曰皇、生丹朱。又有庶子九人、皆不肖。故以天下命舜」とある。

三、注一参照。

四、尚書虞書堯典に、「父頑、母嚚、象傲」、史記に、「舜父瞽叟頑、母嚚、弟象傲」、帝王世紀(太平御覧八一所引)に、「象傲、而父頑、母嚚、咸欲殺舜。舜能和諧、大杖則避、小杖則受」などとある。

五、史記に、「欲殺不可得。即求嘗在側」とある(C. I. Loo 旧蔵北魏石床の舜図の榜題に、「舜子謝父母不在」と見える)。このことは、韓詩外伝八に、「夫子告門人……汝不聞昔者舜為人子乎。小簞則待筯、大杖則逃。索而使之、未嘗不在側。索而殺之、未嘗可得」、説苑三建本に、「孔子曰、汝不聞瞽叟有子名曰舜。舜之事父也、索而使之、未嘗不在側。求而殺之、未嘗可得。小簞則待、大簞則走、以逃暴怒也」、孔子家語四六本に、「子曰、汝不聞乎。昔瞽叟有子、曰舜。舜之事瞽叟、欲使之、未嘗不在於側、索而殺之、未嘗可得。小簞則待過、

大杖則逃走。故瞽叟不犯不父之罪、而舜不失蒸蒸之孝」と見える。なお注四の帝王世紀参照。

右の越絶書の本文を見ると、帝舜図の題記、

帝舜名重華、耕於歷山、外養三年

における、問題の「外養」の語を含む、後半部分は、越絶書本文の——線部、

舜去耕歷山、三年大熟。身自外養

と密接な関わりのあることが、一見して明らかで、本題記は、越絶書によったものか、ないしは、それと同源に出ずるものかの、いずれかであることが間違いない。よってまず、件の題記を史記五帝本紀に基づくものとする、従来の通説は誤りであり、訂正されるべきものであることを、ここで指摘しておきたい。

すると、その題記の解釈も、例えば『漢代画像の研究』に、

舜は歷山に耕し……一年にして居るところ聚となり、二年にして邑、三年にして都となる。」によつて大意だけを題したものであろう

とされる内容とは、当然異なる解釈へと、歩を進めざるを得ない。即ち、その新たな解釈は例えば、

帝舜は、名を重華と言ひ、家を出て三年間、歷山にお

いて耕作した

といったものとなるが、ここで一つ、疑問が湧く。件の題記が従来通説、舜の「居るところ……三年にして都となる」という、舜への衆望を賛したものでないとするれば、右の新たな解釈は一体、舜の何を賛しているのであろうか。この点がよく分からないのである。つまり件の題記の意味が不明となってしまう。このことをさらに考えてみる必要がある。そして、この疑問を解く手掛かりは、謎の多い、上記越絶書の本文の内にあるように思われる。例えば本題記に、

帝舜……耕於歴山^一

と記す部分は、越絶書に、

舜去耕歴山^一

とあって、それによれば、舜は何らかの事情により、生家を去って、歴山へと赴いたことが知られる。その歴山というのは、伝説の山で、例えば唐、李泰等の撰んだ括地志（史記正義所引）に、

・蒲州河東雷首山、一名中条山、亦名歴山、亦名首陽山、亦名蒲山、亦名襄山、亦名甘棗山、亦名猪山、亦名狗頭山、亦名薄山、亦名呉山。此山西起雷首山、東至呉坂、凡十一名。隋州県分^レ之。歴山南有舜井^一・越州余姚有歴山舜井、濮州雷沢県有歴山舜井、二

所又有姚墟、云生舜処也。及嬀州歴山舜井、皆云舜所耕処、未詳也

などとあって、前者には、山西省永濟県（蒲州。舜の都、蒲坂がある）の歴山、後者には、浙江省余姚県（越州）、山東省濮県（濮州）、山西省永濟県（嬀州。河北省とも）の歴山、計三つの歴山のあることが記され、いずれにも舜井が備わり、

皆云舜所耕処^一

と伝えるが、「未詳也」と結ばれるように（浙江省と山東省の歴山近くには、舜の生まれた姚墟があるとも言う）、古来諸説の存する山である。また、唐、封演の封氏聞見記八には、山東省済南市の南にある、歴山（千仏山）のことが記され（市内に舜井も残る）、青木正児氏は、

済南の歴城山（山東）だと云ふ説（淮南子高誘注）が穩かだらう

と言われている（淮南子一の後漢、高誘注に、「歴山在^{（済）}沛陰城陽也。一曰、沛南歴城山也」と見える）。これらのことは、舜の歴山で耕す話が、古くから非常に有名であったことを示す、証拠に外ならないが、不思議なことに、上記の史記を始めとする漢以前、先秦の書物には、舜の歴山に耕す理由を記した資料が見当たらないのである。そもそも舜は、どのような経緯があつて、家を出、歴山へ行かなけ

ればならなかったのか。また、舜は何故、歴山で耕作しなければならなかったのか。その理由を明記する、後漢以前の唯一の資料が、越絶書（及び、本題記）であり、また、越絶書の内容と深く関連する孝子伝である。例えば越絶書には、

舜親父_レ佞母、母常殺_レ舜。舜去耕_二歴山_一

とあり、舜の父と継母が常日頃、舜を亡き者にしようと付け狙い、だから、舜は生家を去って歴山で耕すことになったと言っている。そして、「母常殺_レ舜」（越絶書）とされる経緯を、具体的に詳述するのが孝子伝である。舜が歴山で耕した理由を知るためには、このことをさらに考えてみる必要がある。即ち、舜の物語の展開において、その歴山で耕すことの文学史的意義を、はつきりさせることである。そのことがまた、本題記に、「耕_二於歴山_一」以下を刻ませた目的を知り、一步踏み込んだ解釈を可能とする、一筋の道となるであろう。そこで、越絶書と孝子伝との関連を検討すべきだが、その前に、越絶書の骨組みを確認しておきたい。

越絶書の内容は、大きく二つの部分に分かれている。一つは、堯の話であり、もう一つは舜の話である。そのことは、両者の見出しに、

・堯有_二不慈之名_一

・舜有_二不孝之行_一

とあることから知られるが、それらが越絶書の作文ではなく、古く呂子春秋、莊子、鶏冠子、淮南子等にも録される、言わば俚諺の如きものであり、堯舜のような名君にも瑕瑾の存することを言う、広く知られた成語であることに注意すべきである（前掲越絶書本文、注一参照）。だから、越絶書はまず、

・堯有_二不慈之名_一

・舜有_二不孝之行_一

なる、二つの成語をめぐる議論として、内容を展開しているものであり、それらの注釈とも捉えることが出来る。ここで取り上げるのは、舜をめぐる、後者の一段だが、そこにも一つの不審が残る。それは、

舜有_二不孝之行_一

の説明が、途中で、「此舜有_二不孝之行_一」と結ばれ、次いで、

舜用_二其仇_一而王_二天下_一者

とあって、それがまた、「此為_二王_二天下_一」と結ばれるように見えることである。即ち、後者の一段は、

・舜有_二不孝之行_一

・舜用_二其仇_一而王_二天下_一

の二つの段に分かれるのではないか、という不審である。

この不審については、李步嘉氏『越絶書校釈』に、

「此為王天下」，張宗祥於「為」字下註：「陳本『謂』。樂祖謀校同。步嘉謹按：當以作『謂』字者是。」此謂王天下」句，亦當有脫文。檢上文有起句云「堯有不慈之名」，結句作「此之謂堯有不慈之名」。下文有起句云「桓公召其賊而霸諸侯者」，結句作「是謂召其賊霸諸侯也」。按此段起句當是「舜用其仇而王天下者」，錢培名曾於此句下註：「原本連上，今按例當另起。」樂祖謀校本未另起段，蓋以舜事皆總匯一處，可也。則結句當是「此謂舜用其仇而王天下」。今弁於此（中華書局版四頁（八一））とされるように（張宗祥は、『越絶書校註』〈商務印書館、一九五六年〉の著者〈陳本は、嘉靖丁未陳壇刊本〉、樂祖謀は、点校本越絶書〈上海古籍出版社、一九八五年〉の編者、錢培名は、清の考証学者で、小万巻樓叢書を編み、『越絶書札記』を著わす）、本段を二つの段と見るか、一連の段と見るかの見方が分かれるが、ここでは、本段を一つの段と考えておきたい。その理由としては、例えば、

舜有「不孝之行」

という句が、前述の如く、古くから諸書に散見する成句であるのに対し

舜用「其仇」而王「天下」

の方は、他に所見がないことや、それが同じ舜に関する句

であることなどによる。よって、それは、よく知られた舜有「不孝之行」

の句に対する、さらなる補足のために引かれた句と考えるおきたい。

三

越絶書と孝子伝の関係はどうなっているのでしょうか。

ここで、二つの孝子伝の本文を例に上げたい。その一つは、陽明本孝子伝1舜の本文であり、もう一つは、三教指帰成安注所引の逸名孝子伝のそれである。さて、後述するように、孝子伝における舜の物語は、以下の六つの話柄から成るものと考えられる。

い焚廩

ろ掩井

は歴山で耕すこと

に易米、開眼

ほ堯の二女を娶ること

へ帝位を譲られること

孝子伝の本文中に、い―への符号を付して、それらの話柄の出しの部分を示す。二つの孝子伝を併せて示せば、次の通りである（三教指帰成安注所引の孝子伝本文は、大谷本に拠り、天理本、尊経閣本を参照した。へ―は、事森

〈敦煌本孝子伝〉により補う。

陽明本

舜重花、至孝也。其父瞽瞍、頑愚不別聖賢。用後婦之言、而欲殺舜。便使上屋、於下燒之。乃飛下、供養如故。又使治井、沒井、又欲殺舜。乃密知、便作傍穴。父畢以大石填之。舜乃泣東家井出。因投歷山、以躬耕種穀。天下大旱、民無收者、唯舜種者大豐。其父填井之後、兩目清盲。至市就舜糴米、舜乃以錢還置米中。如是非一。父疑是重花。借人看井、子无所見。後又糴米、对在舜前。論賈未畢、父曰、君是何人、而見給鄙。將非我子重花耶。舜曰、是也。即來父前、相抱号泣。舜以衣拭父兩眼、即開明。所謂為孝之至。堯聞之、妻以二女、授之天子。故孝經曰、事父母孝、天地明察、感動乾靈也。

成安注所引逸名孝子伝

孝子伝云、虞舜字重花。父名鼓叟。々更娶後妻、生象。々敖。舜有孝行。後母疾之、語叟曰、与我殺舜。叟用後妻之言、遣舜登倉。舜知其心、手持兩笠而登。叟等從下放火燒倉。舜開笠飛下。又使舜濤井。舜帶銀錢五百文、入井中穿泥、取錢上之。父母共拾之。舜於井底鑿匿孔、遂通東

家井。便仰告父母云、井底錢已尽。願得出。爰父下土填井、以一盤石覆之。驅牛踐平之。舜從東井出。便投歷山。父坐填井、以兩眼失明。亦母頑愚、弟復失音。如此經十余年。家弥貧窮無極。後母負薪、詣市易米。值舜糴米於市。舜見之、便以米与之、以錢納母帑米中而去。叟怪之曰、非我子舜乎。妻曰、百大井底、大石覆至、以土填之。豈有活乎。叟曰、卿將我至市中。妻牽叟手詣市、見糴米年少。叟曰、君是何賢人、數見饒益。舜曰、翁年老故、以相饒耳。父識其声曰、此正似吾子重花声。舜曰、是也。即前攬父頭、失声悲号。以手拭父眼、兩目即開。母亦聰耳、弟復能言。市人見之、莫不悲歎也。史記云、堯老、令舜攝行天子之政。堯知子丹朱不肖不足授天下。於是權授舜。則天下得其利、而丹朱病。授丹朱則天下病、而丹朱得其利。卒授舜以天下。舜踐天子位。是為虞舜。廿以孝聞。年卅堯举之。在位卅九年也。

越絶書と孝子伝との関係を検討するに際し、上記一への話柄について、確認しておきたいことがある。陽明本孝子伝は、完本孝子伝として、極めて古い内容を保存するものだが、例えば掩井の話柄における、脱落と思われる部分

がある²³（成安注所引逸名孝子伝——部）。その点、成安注所引のそれは、陽明本より古いと考えられるが、しかし、成安注所引のそれも、は歴山で耕すことの山名などを欠き（へゝ部）、

は堯の二女を娶ること

へ帝位を譲られること

の二条を欠く（へは、史記によつて置き換えられている。ほ欠。省略であろう）等、様々な出入りがある。このように、孝子伝本文においても、長い歳月を経る内に、徐々に変化を遂げた部分があるらしいことに、注意しなければならぬ。そして、ここでまず確認しておきたいことは、上記い——への内容が孝子伝以前、例えば後漢時代以前にどれ位、溯り得るのかという問題である。この問題はまた、孝子伝としての舜の物語の成立時期の問題、或いは、伝説としての舜の物語の受容と展開の問題とも深く関わっている。舜の物語における

い焚廩

ろ掩井

の話の源が、驚くべく古いものであることは、次の孟子万章上の記事から知られる（書き下しを添える）。

万章曰、父母使_レ舜完_レ廩、捐_レ階。瞽瞍焚_レ廩。使_レ浚_レ井。出。從而揜_レ之。象曰、謨_レ蓋_ニ都君_一、咸我績。牛

羊父母、倉廩父母。干戈朕、琴朕、弣朕、二嫂使_レ治_ニ朕棲_一。象往入_ニ舜宮_一。舜在_ニ牀琴_一。象曰、鬱陶思_ニ君爾_一。忸怩。舜曰、惟茲臣庶、汝其于_レ予治。不_レ識、舜不_レ知_ニ象之將_レ殺_レ己_一与。曰、奚而不_レ知也。象憂亦憂、象喜亦喜。

（万章曰わく、父母舜をして廩を完めしめ、階を捐つ。瞽瞍廩を焚く。井を浚えしむ。出づ。従つて之を揜う。象曰わく、都君を蓋うことを謨るは、咸我が績なり。牛羊は父母、倉廩は父母。干戈は朕、琴は朕、弣は朕、二嫂は朕が棲を治めしめんと。象往きて舜の宮に入る。舜牀に在りて琴ひけり。象曰わく、鬱陶として君を思うのみと。忸怩たり。舜曰わく、惟れ慈の臣庶、汝其れ予に于て治めよと。識らず、舜は象の將に己を殺さんとするを知らざるかと。曰わく、奚ぞ知らざらんや。象憂れうれば亦憂れえ、象喜べば亦喜ぶのみと）

この記述は、かつて青木正児氏が、

「孟子」の此段の文体は他の文に比して古色あり、或いは「舜典」の逸文で無いかとさへ疑はしめる

と指摘されたものである。さて、上記い——への順序に関して、その象の言に、

二嫂使_レ治_ニ朕棲_一

とあることに注目したい。「嫂」は、兄嫁つまり、堯の二

女のことだから、その象の言は、

ほ堯の二女を娶ること

が、

い焚廩

ろ掩井

に先立つ出来事であることを示している（象の言に「謨蓋都君、咸我績」へ大君の舜を埋める計画は、全て私の手柄だ」ともある。「蓋」は、覆う意とも、害とも）。直前の文に、妻を娶ることを父母に告げる議論があり、そこに、「舜之不告而娶」「帝〔堯〕之妻〔舜〕而不告」などがあり、また、前の章に、

・帝使其子九男二女百官牛羊倉廩備以事舜於畎畝之中
・妻帝之二女

などとされることも、そのことを裏付けるものである。さらに、孟子には、は歴山で耕すことは、直接には記されていないものの、代わって、その前の記述に、

万章問曰、舜往于田、号泣旻天……曰……舜往于田……号泣于旻天于父母……夫公明高、以孝子之心、為不若是恕。我竭力耕田、共為子職而已。父母之不我愛、於我何哉

ともあり（恕は、無頓着なこと）、「舜往于田」とは、歴山で耕すこととされるから、それをはと見做すならば、孟

子における、いーへの叙述順序は、

(1) は歴山で耕すこと

(2) ほ堯の二女を娶ること

(3) い焚廩

(4) ろ掩井

(5) へ帝位を譲られること

となつて（に易米、開眼は不見）、孝子伝（いーへ）とは大きく異なることが知られる。そして、興味深いのは、孟子に見えるその順序が、そのまま史記に踏襲されることである。史記の本文を示せば、次の通りである。

史記

衆皆言於堯曰、有矜在民間曰虞舜。堯曰、然。朕聞之。其何如。岳曰、盲者子、父頑母嚚弟傲、能和以孝、烝烝治不至姦。堯曰、吾其試哉。於是堯妻之二女、觀其德於二女。舜飭下二女於嬀汭、如婦礼。堯善之。乃使舜慎和五典。五典能從。乃遍入百官。百官時序。實於四門。四門穆穆。諸侯遠方賓客皆敬。堯使舜入山林川沢。暴風雷雨、舜行不迷。堯以為聖、召舜曰、女謀事至、而言可績三年矣。女登帝位……堯立七十年得舜……是為帝舜。虞舜者、名曰重華。重華父曰瞽叟……舜父瞽叟盲。而舜母死。瞽叟更娶妻而生象。象傲。瞽叟愛後妻

子、常欲殺舜。舜避逃。及有_レ小過、則受_レ罪。順_二事父及後母与_レ弟、日以篤謹、匪有_レ解。舜冀州之人也。舜耕_二歷山_一、漁_二雷沢_一、陶_二河浜_一、作_二什器於寿丘_一、就_二時於負夏_一。舜父瞽叟頑、母嚚、弟象傲。皆欲殺_二舜_一。舜順適不_レ失_二子道_一。兄弟孝慈。欲殺不_レ可得。即求嘗在側。舜年二十以_レ孝聞。三十而帝堯問_二可用者_一。四岳咸薦_二虞舜_一曰、可。於是堯乃以_二二女妻_二舜_一、以觀_二其内_一、使_二九男与_レ処_一以觀_二其外_一。舜居_二嬌汭_一、内行_二弥謹_一。堯二女不敢以貴驕、事_二舜親戚_一、甚有_二婦道_一。堯九男皆益篤。舜耕_二歷山_一。歷山之人皆讓_二畔_一。漁_二雷沢_一。雷沢上人皆讓_二居_一。陶_二河浜_一。河浜器皆不_二苦窳_一。一年而所居成聚、二年成_レ邑、三年成_レ都。堯乃賜_二舜絺衣与_レ琴、為_二築倉廩_一予_二牛羊_一。瞽叟尚復欲殺_二之_一、使_二舜上塗廩_一。瞽叟從_二下縱火焚_レ廩_一。舜乃以_二兩笠_一自扞而下去、得不_レ死。後瞽叟又使_二舜穿_レ井_一。舜穿_レ井、為_二匿空_一旁出。舜既入深。瞽叟与_レ象共下_レ土实_レ井。舜從_二匿空_一出去。瞽叟象喜、以_二舜為_二已死_一。象曰、本謀者象。象与_二其父母_一分。於是曰、舜妻堯二女与_レ琴、象取_レ之。牛羊倉廩、予_二父母_一。象乃止_二舜宮_一居、鼓_二其琴_一。舜往見_レ之。象鄂不_レ懌。曰、我思_二舜正鬱陶_一。舜曰、然。爾其庶矣。舜復事_二瞽叟_一愛_二弟弥謹_一。於是堯乃試_二舜五典百官_一。皆治……以揆_二百事_一、莫_レ不_二時序_一。

……舜賓_二於四門_一……於是四門辟、言_二母凶人_一也。舜入_二于大麓_一。烈風雷雨不_レ迷。堯乃知_二舜之足_レ授_二天_一下……舜年二十以_レ孝聞。年三十堯_レ擧_レ之。年五十攝_二行天子事_一。年五十八堯崩。年六十一代_二堯踐_二帝位_一。史記には、は歷山で耕すことが、——線部a、bの二箇所
に記されていて、aは、は堯の二女を娶ることに先立つら
しく、孟子と同じとなるが、bは、明らかにほの後にある
から、いーへの叙述順序は、
(1)ほ堯の二女を娶ること
(2)は歷山で耕すこと
(3)い焚廩
(4)ろ掩井
(5)へ帝位を譲られること
となる(に易米、開眼は不見)。即ち、bの場合、ほ、は
は入れ替わるものの、
ほ堯の二女を娶ること
が、
い焚廩
ろ掩井
に先立つことは、史記も孟子と変わりがない。このことを
さらに推し進め、二女の役割を強調するのが、劉向の列女
伝1「有虞二妃」である。その本文を示せば、次の通り

である。^⑤

列女伝

有虞二妃者、帝堯之二女也。長娥皇、次女英。舜父頑、母嚚、父号瞽叟。弟曰象、敖游於嫫。舜能諧柔之、承事瞽叟以孝。母憎舜而愛象、舜猶内治、靡有姦意。四岳薦之於堯。堯乃妻以二女、以觀厥内。二女承事舜於畎畝之中、不下天子之女故而驕盈怠嫚。猶謙讓恭儉、思尽婦道。瞽叟与象謀殺舜、使塗廩。舜婦告二女曰、父母使我塗廩。我其往。二女曰、往哉。時唯其戕汝。時唯其焚汝。鵲如汝裳衣、鳥工往。舜既治廩。乃戕旋階、瞽叟焚廩。舜往飛出。象復与父母謀、使舜浚井。舜乃告二女。二女曰、兪。往哉。時亦唯其戕汝。時唯其掩汝。去汝裳衣、竜工往。舜往浚井。格其出入、從掩。舜潜出其旁。時既不能殺舜。瞽叟又速舜飲酒。醉將殺之。舜告二女。二女乃与舜藥浴汪。遂往。舜終日飲酒不醉。舜之女弟歎手憐之。与二嫂諧。父母欲殺舜、舜猶不怨。怒之不己、舜往于田、号泣、日呼旻天、呼父母。惟害若茲、思慕不己。不怨其弟。篤厚不怠。既納於百揆、實於四門、選於林木、入於大麓。堯試之百方、每事常謀於二女。舜既嗣位、升為天子。娥皇為后、女英為妃

列女伝における、いーへの順序は、

(1) ほ堯の二女を娶ること

(2) い焚廩

(3) ろ掩井

(4) は歴山で耕すること（——線部c）

(5) へ帝位を譲られること

である。に易米、開眼を欠くことは、史記に同じい。また、は歴山で耕すことは前述、孟子万章上（「舜往于田、号泣于旻天于父母」）に基づくものだが、劉向がその——線部cを、は歴山で耕すこととの関連で捉えていたことは、同じ劉向の新序一雜事に、

昔者舜自耕稼陶漁而躬孝友、父瞽瞍頑、母嚚及弟象傲、皆下愚不移。舜尽孝道、以供養瞽瞍。瞽瞍与象為浚井塗廩之謀、欲以殺舜、舜孝益篤、出田則号泣、年五十、猶嬰兒慕、可謂至孝矣。故耕於歴山、歴山之耕者讓畔。陶於河浜、河浜之陶者、器不苦窳。漁於雷沢、雷沢之漁者分均。及立為天子、天下化之……莫不慕義、麟鳳在郊。故孔子曰、孝弟之至、通於神明、光于四海。舜之謂也

と述べていることから明らかである。右の新序には、堯の二女が登場せず一見、孝子伝に似るが、——線部c（は）は（偽古文の尚書虞書大禹謨にも、「帝初于歴山、往于

田、日号泣曼天于父母」と見える)、舜の「年五十」の時のこととされていることに注意すべく(孟子告子下に、

「孔子曰、舜其至孝矣。五十而慕」、万章上に、「大孝、終身慕父母。五十而慕者、予於大舜見之矣」と見える)、舜が堯に見出だされるのが三十才、堯の摂政となるのが五十才だから(尚書堯典に、「舜生三十、徴庸三十」、史記に、「舜年二十以孝聞。年三十堯挙之。年五十攝行天子事」などと見える)、文中に明記こそされていないものの、新序の——線部cが堯の二女を娶った後のことであることは、列女伝と同じとしなければならぬ(新序もまた、に易米、開眼を欠く)。このように孟子、史記、列女伝(新序)などでは、ほ堯の二女を娶ることが、

い 焚廩

ろ 掩井

に先立ち(史記へb)、列女伝、新序では、は歴山で耕すことにも先立つ)、それらが全て、舜に対する堯の試みであり、二女の助けによって、舜がそれを切り抜けられたと解されることは、例えば列女伝に、

堯試之百方、每事常謀於二女

とある通りで、かつて増田欣氏は、舜の物語におけるこの特徴を、

史記型

と呼ばれ、ほ堯の二女を娶ることを、物語の大団円に置く孝子伝の、

孝子伝型

とは、明確に区別されたのである^⑧。そもそも舜の物語は、民間伝説、昔話における、典型的な継子譚と目されるもので、孝子伝のそれは、そこに孝のモチーフを重ねた物語なのであり、史記(——線部b。また、孟子)のそれは、さらにそこに二女のモチーフを加えた物語となっていて、例えば列女伝のそれは、その点を徹底させる形で、二女をヒロインとする物語としたのである(タイトルが「有虞二妃」となっている)。そして、増田氏の明らかとされた上記、舜の物語の二つの型における、

は 歴山で耕すこと

の役割を考察してみると、その特殊な機能を浮き彫りにすることが出来る。

例えば孝子伝型においては、はの役割は、極めてはっきりしていて、その機能は、話柄前半のい焚廩、ろ掩井を、後半のに易米、開眼(及び、ほへの大団円)へと導く、結節点となっていることで、言わば原因から結果への結び目の働きをしていることである。そして、話柄の順序いへの中で、は歴山で耕すことの位置は、文脈上、動かすことが出来ない。それに対し、もう一方の史記型においては、

例えばそれが冒頭に来ても（孟子、史記へa）、二番目（即ち、焚廬掩井の前）に来ても（史記へb）、三番目（焚廬掩井の後）に来ても（新序）、四番目（同）等に来ても（列女伝）良く、孝子伝型とは違って、は歴山で耕すことが文脈上、定まった位置というものを持っていない。その理由として、史記型のそれは、舜の孝子であることを踏まえつつも、は歴山で耕すことが、舜の人望を称える句として、早くから定型句化していたことが考えられよう。つまり孝子伝型と史記型においては、は歴山で耕すことの機能が異なり、解釈が違うのである。このことは、は歴山で耕すことが本来一つのものでありながら、とても古い時代に、二つの解釈に分かれたことを示唆している。ならば、それは一体、何時頃起きた出来事なのであろうか。また、そのことは、文学史的に見た、舜の物語の成立、展開において、どのような意義を持つのであろうか。

四

舜の物語は、古くはどのような形をしていたのであろうか。また、は歴山で耕すことは、そこではどのような役割を果たしていたのであろうか。青木正児氏はかつて、舜の物語の起源を民間伝説に求め、

舜に就いては齊か魯あたりの一地方で民間に行はれて

ゐた伝説を拉し来つたものかも知れぬと思はれる……乃ち其の地方の民間伝説であつたであらうと想像されるのである

と述べ、

舜の伝説はなか／＼活躍してゐる。其中には民間伝説的分子も可なり多量に含まれてゐるやうである。既に述べて置いた「墨子」「孟子」に見ゆる舜が諸馮の生れで、歴山に耕し、河浜に土器を造り、雷沢に漁し、具さに辛酸を甜めたと云ふ如き物語は、恐らく民間伝説のまゝであらう。又「孟子」（万章上）に見ゆる舜の父母が弟の象を愛して舜を虐待し、之に倉廩を治めしめて梯子を取り除き、井を浚へしめて弟が上から蓋をして之を殺さんと謀つたと云ふ一条の如きは、「楚辞」（天問）にも『舜厥の弟に服す、終に然れども害を為す。』と詠じてあつて、如何にも民間伝説らしき面影が存してゐる。「孟子」の此段の文体は他の文に比して古色あり、或は「舜典」の逸文で無いかとさへ疑はしめる。此話の前章にある舜が田に往き旻天に号泣したと云ふ事も民間の伝説で、是も「書」に見えて居た事柄かも知れない。遂に舜が出世して帝に用ひられ、帝の厚遇を受けて其の二女を降嫁さるゝに至つたと云ふ話も、民間伝説の旧であらう。但其の仕へた帝

が堯であると云ふ事は「書」の作者の創作であらう。舜が帝に用ひらるゝ以前に関する説話は略ぼ民間伝説と認められるが、其れ以後の事になると段々怪しくなつて来る。「堯典」の舜が登用せらるゝ際の記事、『帝曰、我其試哉。女_ニ于時_ト、觀_ニ厥刑_ニ于二女_一。』の如き、幾ら群臣が鰥_{やもめ}の舜と云ふ者が、民間に居ますと曰つて推薦したからとて、何等功績を顕はさぬ前から二女を嫁するは突飛すぎる。是は「詩」の「思齊」(大雅)に『刑_ニ于寡妻_一、至_ニ于兄弟_一、以御_ニ于家邦_一。』とあるなどから思ひついて、書いたものかも知れぬ。亦以て伝説修飾の一例と為すことが出来よう。又舜が用ひらるゝの後、諸種の祭を行つたり、天下を巡狩したりした等の事が細かく記されてゐるのは、封禪の礼を利用したまでで、皆固より作者修飾の筆であつて、毫も民間伝説的価値はない。ただ舜が堯の譲を受くるの後、禹・契・稷・皋陶等を任用して国事を託するの一条は、既に詳論した如く個々別々の民間伝説を集成したものであつて、之を以て堯舜伝説の大団円としたわけである。

と論じられたことがある。青木氏の見解は、舜の物語における民間伝説的な要素と、今日に残る文献との関係を、的確に整理された説として、従うべきものである。舜の物語

に関する古文獻の数は、決して多くない。例えば尚書の舜典は散逸し、現存古文の舜典は、今文の堯典の後半を、それに当てたに過ぎない。そして、孟子の舜説話を考察した大谷邦彦氏は、「儒家が取り入れる以前のいわば原舜説話がどのようなものであつたかは、直接の資料もなく、「孟子」の記述を通して間接的に臆測するしかない」としつつも、

すなわち、すでに見た如く孟子以前に舜説話はあるまとまつた形をとつていたと考えられ、しかもそれは古代中国の特殊な家族制度とそれの社会的地位とから発達した「孝」を中心とする説話であり、その孝は儒家においてはすべての徳の本としても考えられる重要な道徳的義務であるから、ここに舜が儒家にとり入れられまた人倫の至れる者といわれる要素が存した

と述べ、「〔尚〕書の舜は……「瞽子、父頑母嚚、象傲、克諧以孝、烝烝乂不格姦」というのが書の舜の孝をいうすべである」とされた如く、一定の纏まりを持った舜の物語の古文獻は、孟子を嚆矢とすべく、次いで史記を上げなければならぬ。その史記(――線部b)は、孟子に基づくものであり、列女伝も同じであることは、ほ堯の二女を娶ることを、焚廬掩井の前に置く伝承が、極めて古いことを示す事実と言えようが、問題は、孟子、史記(列女伝)の

舜の物語が、青木氏によって、舜の

何等功績を顕はさぬ前から二女を嫁するは突飛すぎる
と言われ、さらに西野貞治氏によって、

元来実に不自然な叙述であ(る)

と指摘された通り、それを直ちに舜の物語の古型とは見做
し難いことである。また、このことが前述、舜の物語にお
ける、

は歴山で耕すこと

の位置とも、深く関連していることである。そして、その
問題を考えさせる第一級の資料が、越絶書及び、本題記な
のである。舜の物語は、大谷氏が、「孝」を中心とする説
話」として、

孟子以前に舜説話はあるまとまった形をとつていた
と言われたように、元来は一つのものであったことが間違
いない。そして、

は歴山で耕すこと

の順序は、古くは継子譚の常として、舜に對するいじめ
(焚廬掩井など)の結果である、継母等への報復(易米、
開眼など)を導く前述、孝子伝型いへにおける、**は**の位
置にあったものと考えられる。ところが、その孝子伝型成
立の上限を示す資料は、五世紀以前の北魏時代に溯る、寧
夏固原北魏墓漆棺画などが存するものの、舜へのいじめ

(焚廬掩井)から、

は歴山で耕すこと

を経て、報復(易米、開眼)へと結び付ける資料、特にそ
れを、

に易米、開眼

へ結び付ける、漢代にまで溯るような資料の見当たらない
ことが、これまで孝子伝型の上限を考える上で、大きな障
礙となつていた。即ち、舜の物語における、

に易米、開眼

の話柄の、漢代における存在が、証明出来なかつたのであ
る。しかし、越絶書及び、本題記は、実はそのことを確認
する、極めて重要な資料に外ならない。以下、このことを
説明すべく、まず舜の物語における、史記型の成り立ちに
ついて、聊か検討してみたい。

は歴山で耕すこと

が、舜の物語の一部であつたとするなら、その意義が変わ
つたり、位置が自在のものとなり得る前提には、それが舜
の物語から切り離されることが、必要であつたと思われる。
史記型の原書、史記の本文を見ると、その切り離しをめぐ
る、興味深い事実が目に残る。上掲史記の本文中には、
例えば舜を「欲_レ殺」という記述が、次の甲一丙の……線
部三箇所に見えている(乙を数えれば、四箇所。孟子万章

にも、「舜不_レ知象之將_レ殺_レ己与」、「象日以_レ殺_レ舜為_レ事」などとある。

甲、常欲_レ殺_レ舜

乙、皆欲_レ殺_レ舜（乙、欲_レ殺_レ不_レ可_レ得）

丙、尚復欲_レ殺_レ之

当句は、継子譚である、舜の物語の中で、いじめを導く常套句とすべきもので、例えば焚廩掩井を導く丙は、そのことを示している。当句は、一般的には一度、記されれば良いもので（船橋本、成安注所引、敦煌本孝子伝（事森）等、列女伝、新序等。陽明本は二度）、史記のそれは、聊か尋常ならざる多さと言え、それらが舜の物語からの話柄の切り離しと、関わることを示唆している。そして、史記には、当句を使って、一つの話柄を実際に切り離している、明徴が存する。乙「皆欲_レ殺_レ舜」句がそれである。乙の前後の本文を示せば、次の通りである。

舜父瞽叟盲。而舜母死。瞽叟更娶_レ妻而生_レ象。象傲。

瞽叟愛_レ後妻子、常欲_レ殺_レ舜。舜避逃。及_レ有_レ小過、則

受_レ罪。順_レ事父及後母与_レ弟、日以_レ篤謹、匪_レ有_レ解。

舜冀州之人也。舜耕_レ歷山、漁_レ雷沢、陶_レ河浜、作_レ什

器於寿丘、就_レ時於負夏。舜父瞽叟頑、母嚚、弟象傲。

皆欲_レ殺_レ舜。舜順適不_レ失_レ子道。兄弟孝慈。欲_レ殺_レ不_レ

可_レ得。即求_レ嘗在_レ側。舜年二十以_レ孝聞。三十而帝堯

問_レ可_レ用者。四岳咸薦_レ虞舜。曰、可。於是堯乃以_レ二女妻_レ舜、以觀_レ其内、使_レ九男与_レ处、以觀_レ其外。舜居_レ嬌汭、内行弥謹。堯二女不敢以貴驕、事_レ舜親戚、甚有_レ婦道。堯九男皆益篤。舜耕_レ歷山。

史記では、甲「常欲_レ殺_レ舜」から始まる、

常欲_レ殺_レ舜。舜避逃。及_レ有_レ小過、則受_レ罪……皆欲_レ殺_レ舜……欲_レ殺_レ不_レ可_レ得。即求_レ嘗在_レ側

の文章が、乙「皆欲_レ殺_レ舜」句によって、二つの話に分けられてしまっている（乙は、後掲韓詩外伝等の㊹4を言い替えた句であると共に、形の上では、乙を受けた句）。しかし、その話は本来、一つのものであることが、韓詩外伝八、說苑三建本、孔子家語四六本等の記述から知られるのである。それら三書の本文を併せ示せば、次の通りである。

韓詩外伝

曾子有_レ過、曾皙引_レ杖擊_レ之仆_レ地。有_レ間乃蘇。起曰、先生得_レ無_レ病乎。魯人賢_レ曾子、以告_レ夫子。夫子告_レ門人、参来（勿_レ内也。曾子自以為_レ無_レ罪、使_レ人謝_レ夫子。夫子曰）。汝不_レ聞_レ昔者舜為_レ人子乎。小箠則待_レ笞、大杖則逃。索而使_レ之、未_レ嘗不_レ在_レ側、索而殺_レ之、未_レ嘗可_レ得。今汝委_レ身以待_レ暴怒、拱立不_レ去。非_レ王者之民、其罪何如。詩曰、優哉柔哉、亦是戾矣。又曰、載色載笑、匪_レ怒伊教。

説苑

曾子芸_レ瓜而誤斬_二其根_一。曾皙怒、援_二大杖擊_レ之。曾子仆_レ地、有_レ頃乃蘇、蹙然而起、進曰、曩者、參得罪於大人、大人用_レ力教_レ參、得_レ無_レ疾乎。退屏鼓_レ琴而歌、欲_レ令_二曾皙聽_二其歌声_一令_レ知_二其平_一也。孔子聞_レ之、告_二門人_一曰、參來勿内也。曾子自以_レ無_レ罪、使_二人謝_二孔子_一。孔子曰、汝不聞、瞽叟有_レ子名曰_レ舜。舜之事_二父也_一、索_レ而使_レ之、未嘗不_レ在_二側_一、求而殺_レ之、未嘗可_レ得。小箠則待、大箠則走、以逃_二暴怒_一也。今子委_レ身以待_二暴怒_一、立_レ体而不_レ去、殺_レ身以陷_二父不義_一。不孝孰是大乎。汝非_二天子之民_一邪。殺_二天子之民_一、罪奚如。以_二曾子之材_一、又居_二孔氏之門_一、有_レ罪不_レ自知、処義難乎。

孔子家語

曾子耘_レ瓜、誤斬_二其根_一。曾皙怒、建_二大杖_一、以擊_二其背_一。曾子仆_レ地而不_レ知_二人久之_一。有_レ頃乃蘇、欣然而起、進_二於曾皙_一曰、嚮也、參得罪於大人、大人用_レ力教_レ參、得_レ無_レ疾乎。退而就_レ房、援_レ琴而歌、欲_レ令_二曾皙而聞_二之_一其体康_一也。孔子聞_レ之而怒。告_二門弟子_一曰、參來勿内。曾參自以_レ為_レ無_レ罪、使_二人請_二於孔子_一。子曰、汝不聞乎、昔瞽叟有_レ子曰_レ舜。舜之事_二瞽叟_一、欲_レ使_レ之、未嘗不_レ在_二於側_一、索而殺_レ之、未嘗可_レ得。小箠

則待_レ過、大杖則逃走。故瞽叟不_レ犯_二不父之罪_一、而舜不_レ失_二烝烝之孝_一。今參事_レ父、委_レ身以待_二暴怒_一、殫而不_レ避。既身死、而陷_二父於不義_一。其不孝孰大_レ焉。汝非_二天子之民_一也。殺_二天子之民_一、其罪奚若。曾參聞_レ之曰、參罪大矣。遂造_二孔子_一而謝_レ過。

韓詩外伝以下、三書の——線部が、史記甲、乙句の後に記される話の原話である（前掲越絶書の注五参照。史記甲、乙句以下と、三書における内容の対応を、㊦、㊧で示す）。三書の——線部は、孔子の語とされるもので、それによれば、この話は、孔子以前のもとなるが、この話の成り立ちは、聊か複雑で、その——線部は、実は曾子の話の一部なのである。韓詩外伝以下の曾子の話の粗筋とは、次のようなものである（「」は、説苑、孔子家語）。曾子は、「瓜の草刈をしていて、誤って瓜の根を斬ってしまった、」父の曾皙に大杖で殴られて、地面に倒れる。曾子は、暫くして起き上がって、まず父の無事を確かめ、「さらに琴を弾き歌を歌って、自らも無事であることを父に示したが、」そのことを聞いた孔子は、激怒して、「曾子を門に入らせない。曾子は、自らの行動を正しいと思いつつも、孔子に謝罪した所、」孔子は、或る舜の話をも門人（曾子）に語って聞かせる。「曾子は、それを聞き、自らの行為の非を悟った」というものである。そして、その時に孔子の語った話

が、——線部なのである。その曾子の話はまた、孝子伝に

取られ（曾参の五孝の第一孝の彈琴譚）、三彩四孝塔式缶には、題記を伴って図像化される、著名なものとなっている。さて、まず史記は、甲、乙句以下に、三書の——線部を引くことが知られる。さらに史記は、乙「皆欲殺舜」句によって、例えば韓詩外伝の——線部を、甲、乙の二つに分けていることが明らかである（説苑、孔子家語は、韓詩外伝甲、乙の順序を逆転し、乙、甲とする。史記の順序は、韓詩外伝と一致する）。即ち、史記は、例えば韓詩外伝——線部の後半乙を、乙句によって切り離しているのである。このことは、元来一つの話が、場合によって切り離され、半独立化してゆくことがあり得ることを、良く示す例と言え、例えば舜の物語における、は歴山で耕すことが切り離され、半独立的に成句化してゆく過程を示唆する、極めて興味深い事象と言えるであろう。

五

もう少し、史記における甲、乙句による、一つの話柄の切り離しの問題を検討しよう。例えば韓詩外伝甲、乙の内容をさらに1、2（甲）、3、4（乙）に細分すると（説苑、孔子家語が甲、乙を逆転することは、前述の通り）、史記と三書との対応は、本文中の1—4の如くとなる。史

記は、例えば韓詩外伝の甲1、2、乙3、4を、

甲（2、1）

乙（4、3）

と一層細かく転倒させていることが知られる（史記は、小箒「小極」を、小過と言ひ換える）。三書甲乙1—4の構成は、

甲1舜は、父の小箒ならば、留まる

2大杖ならば、逃げる

乙3用事があれば、常に側にいる

4舜を殺そうとすると、殺せない「逃げる」

となっていて、甲乙共、舜の逃げる結末となるが、司馬遷は、

甲2「大杖ならば」逃げる

1小さな過とがならば、留まり受ける

乙4殺そうとしても、殺せない「逃げる」

3用事があれば、常に側にいる

と、12、34を逆転させ、三書の甲乙の、舜が父から逃げるという、文末の印象を和らげようとしたものと思われる。

ところで、韓詩外伝など三書の——線部は、越絶書にも引かれている（前掲注五）。その部分の本文を改めて示せば、次の通りである。

舜為_二瞽叟子_一也。瞽叟欲_レ殺_レ舜、未_二嘗可_レ得_一。呼而使_レ之、未_二嘗不_レ在_レ側

三書の——線部㊦、㊧との対応は、右の如く、越絶書は、それらの㊧を引いており、しかも3、4を転倒させる点が史記に同じい。ために越絶書は、史記を引用したかに見えるのだが、越絶書の例えば、

・未_二嘗可_レ得_一（三書も同じ）

・未_二嘗不_レ在_レ側（三書も同じ）
於側_二）

などは、史記の、

・不可得

・嘗在側

とは一致せず、また、越絶書「舜為_二瞽叟子_一也」も、例えれば説苑「瞽叟有_レ子曰_レ舜」などに拠るものと見られ、越絶書の史記を引いたものでないことが、確認出来ることも注意すべきである。

韓詩外伝に、孔子の語として伝えられる、舜の挿話も、大変古いものである。大体、その撰者の韓嬰は、司馬遷（前145?—前86?）より一時代前、文帝（前180—前157）、景帝（前157—前141）期に活躍した人物なのであり、孔子の語ったとされる、舜の挿話も、尚書の舜典にあったか、どうかは定かではないが、古く民間伝説として伝わる、舜の

物語の一部であったことは、間違いない事実と思われる。そして、その舜の挿話は、継子譚である舜の物語、即ち、孝子伝型の一部として、舜に対するいじめの一環をなすものであり、「欲_レ殺_レ舜」（史記）の結果、舜が逃げて、

は歴山で耕すこと

の前提となる、挿話であった可能性が極めて高い。そのことを示す徴証が一、二存する。その一つは、敦煌出土の舜子変（舜子至孝変文）である。舜子変は、は歴山で耕すことの内容を象耕鳥芸譚としたり（二十四孝、第一話の舜の物語の源流となる）、その前提となる、舜へのいじめとして、現存舜子変の一部欠落部に対し入矢義高氏がかつて、

このあとに続く筋書は、「舜子が継母の足の傷を調べようと裳をまくって見ているところへ、ぱったり父が帰って来てその有様を見、けしからぬ子だと邪推して怒る」というのではないかと想像した。というのは、中国の継子いじめの話には、亭主を怒らせる最も効果ある方法として、継子をこのようなませた悪者に仕立てる筋書が古くからよく見られるからである

と指摘された^㉔、桃摘みの話など、民間伝説的な色合いの非常に濃い、話柄を含む特徴を有するが、

い焚廬

ろ掩井

に先立つ、その桃摘みの話に続けて、次のような、舜を大杖で打ち殺そうとする話が見える^⑧（『敦煌変文集』下所収に拠り、P二七二一vを参照する。入矢氏による訳文を添える）。

瞽叟喚言舜子、阿耶暫到潦陽、遣子勾当家事、縁甚於家不孝。阿嬢上樹樞桃、樹下多埋惡刺、刺他両脚成瘡、這個是阿誰不是。舜子心自知之、恐傷母情、舜子与招伏罪過、又恐帶累阿嬢。己身是兇、千重万過、一任阿耶鞭恥。瞽叟忽聞此語、聞嘆具不可嘆、聞喜且不可喜、高声喚言、象兒与阿耶三条荆杖来、与打殺前歌子。兇道取荆杖、走入阿嬢房裏、報云、阿耶交兒取杖、打殺前家歌子。後妻報言瞽叟、男女罪過須打、更莫交分踈道理。像見取得荆杖到来、数中揀一条簍物、約重三兩便不是。把舜子頭髮、懸在中庭樹地、從項決到脚歇、鮮血遍流灑地。瞽叟打舜子、感得百鳥自鳴、慈鳥灑血不止。舜子是孝順之男、上界帝釈知委、化一老人、便往下界、来至方便与舜、猶如不打相似。舜即帰来書堂裏、先念論語孝経、後読毛詩礼記。

（瞽叟は舜子を呼びつけ、「父さんがしばらく遼陽に行く間、おまえに家事をまかせるといったらう。それにどうして不孝をやらかすのじゃ。母さんが樹に登って桃を摘んだ時、樹の下にたとと刺を埋め、そいつで両

足を刺して傷を作った。それはいったい誰の咎じゃ」。舜子は察しはついたものの、母の顔をつぶしてはと、罪あやまちを白状し、そのうえ母が巻き添えになつてはとの存念から、「私は子の身でありながら、たいそう悪いことをしました。どうか父さん、お好きないように打ち叩いて」と聞くとや瞽叟、怒るの怒るまいの、大声張りあげ、「おい象兒（後妻の連れ子の名）、父さんに荆杖を三本持つて来てくれ。先妻の兄貴を打ち殺してやる」。象兒は荆杖を取つて来いと聞くと、母の部屋に駆けこんで、「父さんがはやくに杖を取つて来いって。先妻の兄貴を打ち殺してやるって」。後妻が瞽叟に申すよう、「子どものあやまちは打つことです。言いわけなんぞさせてはなりません」。象兒が荆杖を持つてくるや、なかから揀り出した太いやつ。重さは三兩がそこはあろうか。舜子の髪をばひつつかみ、中庭の樹に宙吊りにし、首から足の先までぶちのめす地にしたたる体じゅうの鮮血。瞽叟舜子を打てば、憐んで百鳥は鳴き叫び、慈鳥は血を吐いて止まらぬ。舜子は孝子なれば、天界の帝釈天かくと知るや、一人の老人に化して下界へ下りたまひ、舜子のためにお計らい、おかげで打たれぬと同然でありました。舜は書斎に戻り、先ず『論語』・『孝経』を読み、それから『毛

詩・『礼記』の勉強

舜子変を見ると(続きに、「学得甚鬼禍術魅、大杖打又不死へいかな咒術を覚えたのやら、大杖で打つても死にはせず」^②ともある)、

・大杖で打つ(桃摘み)

い焚廬

ろ掩井

は歴山で耕すこと

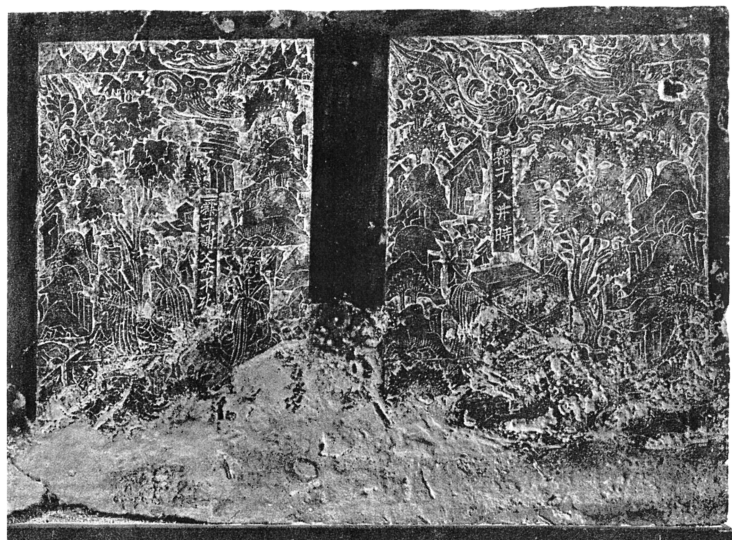
という風に、物語の展開していることが、極めて興味深く、このことは、舜子変の依拠した孝子伝(現存しない)に、舜が歴山へ逃げる原因となる(は)、話柄の一つとして、焚廬掩井と並んで、舜を大杖で打つ(桃摘み)の話のあったことを、考えさせずには措かないものがある。この話は前述、舜の物語における、金銭のプロットなどと同様に、今の陽明本等からは、失われてしまったものと思われる。

韓詩外伝の孔子の語が、舜の物語の一部であったことを示唆する、もう一つの資料は、C・T・Loo 旧蔵北魏石床、右側板に描かれた舜図二面に見える、下図の題記である(図二)。図二は、右から見るべきもので、二面それぞれに、

・舜子入井時(右)

・舜子謝父母不在(左)

という題記がある(在の字は、死とも読めるが、意味が少し変である)。その左の題記の「不在」は、明らかに韓詩外伝②③などの、



図二 C・T・Loo 旧蔵北魏石床舜図

未嘗不在（於）側

を受けるもので、意味は、舜がいつも側に居られないことを父母に恥じる、ということであろう。二つの図の順序に従えば、それは、

ろ掩井

の次となるが、当図は、大団円を表わすものとも解釈される。即ち、舜と瞽瞍とが和解する場面である。そのことは、古く孟子万章上に、

書曰、祗載見^ミ瞽瞍、夔^ミ夔齊栗。瞽瞍亦允若。

（書に曰わく、載を祗^{こと}みて瞽瞍に見え、夔^ま夔として齊^{せい}栗^{りつ}す。瞽瞍も亦允^{まこと}とし若^{したが}へりと）

と見え（偽古文とされる尚書虞書大禹謨の前述、「帝初于^ミ歷山、往^ミ于田、日号^ミ泣于旻天于父母」の続きに、「負^ミ罪引^ミ慝、祗載見^ミ瞽瞍、夔^ミ夔齊栗。瞽亦允若」とも見える〈引慝は、悪いのを自分のせいとする意〉、陽明本、成安注所引孝子伝には見当たらないが（成安注所引は、ほへを省き、代わりに史記を引く）、船橋本の^ミにの次に、

舜起拝賀。父執^ミ子手、千哀千謝。孝養如^ミ故、終無^ミ変心^ミ。

と見え（ほへ欠。舜子変は、瞽瞍が恥じて、継母を殺そうとするのを、舜が止める）、取り分け、興味深いのが、纂図附音本注千字文23、24「推位讓國、有虞陶唐」注の^ミにの次

に、

舜再拜曰、為^レ子不孝、違^ミ於曠野。自今已後、更不^レ如^レ此。父亦大悔言、今後不^ミ敢拳^レ意向^ミ吾聖子^ミとあつて、それは、

舜が再拜して、「お側から離れて曠野^{あれの}に行つておりましたのは、人の子として不孝でございました。今より後は、二度とそんなことはいいたしません」と言うのと、父もまたおおいに悔いて、「これからは、決して私心を出して私の聖なる子に刃向^{はむか}つたりしません」と言つた

ということだから、その「違^ミ於曠野」は、は歴山で耕すことを指していることが明らかで、舜はその物語の大団円において、歴山へ逃げたことを、父に謝罪していることが知られる。この事実は、例えば韓詩外伝②の、

索³而使^レ之、未嘗不^ミ在^レ側、索而殺^レ之、未嘗可得^レの4を、舜が歴山へ逃げたことと解し、その②が大団円の場面に、「不^レ在^レ側」を父に詫げる文脈で、引かれ得ることを示すものである。そして、陽明本や成安注所引の孝子伝には見当たらないものの、例えば韓詩外伝の②句は、孝子伝のその物語の大団円、舜と瞽瞍との和解の場面に、引かれていた可能性があつて、C・T・Loo旧蔵北魏石床の、舜子謝^ミ父母不在^ミ。

は、その句を題記化したものとも考えられる。韓詩外伝の①、②句が古い伝承であり、かつて舜の物語の一部を成したものであることは疑いないが、①、②は、互いに関連しつつ、別の話でもあり、その②が孝子伝の大団円に引かれるについては、韓詩外伝以前の事柄に属するののか、或いは韓詩外伝などから引用されたものなのか、判然とせず、なお今後の検討課題とすべきである。

史記の乙句が、韓詩外伝などの①、②を切り離したものであることは、かくの如くだが、その乙句の切り離したものの一つが、

は 歴山で耕すこと

に外ならないことは（——線部 a、b）、注意を要する。即ち、史記甲句の後に、——線部 a（「舜耕歴山」）があり、乙句の後に、再び——線部 b（「舜耕歴山」）があつて、はの話柄の重出することは、先に触れた通りだが、その内、乙句は、

ほ 堯の二女を娶ること

へ、さらに——線部 b（は）へと続き、孟子を受ける、史記型の舜の物語は、実は乙句（の前文）から始まっているからである。そして、甲句に続く——線部 a（は）は、乙句により切り離され、且つ、ほに先立っていることが非常に面白い。つまり前述、西野氏が孝子伝の舜の物語に対し、

「しかし孟子・史記に見える相違点こそ……元来実に自然な叙述であり、変容を加えられる要素を内に含んでいる訳である」と指摘された諸点、即ち、孝子伝のそれは、

尚書・孟子・史記などの正確な古典の記載と著しい対照をなす。即ち比較をなし得る共通点について考察をすると史記（五帝本記）では先ずその徳行を認められて堯の二女を娶り、堯の試をうけて歴山に耕し、次いで焚廬掩井の厄を経た後で帝位を譲られるのであり、孟子（万章上）は歴山に耕するの記載を欠く外は史記に等しい。即ち、堯の讓位を受けることの外は悉く孝子伝とは順序が逆であることが注意される。そしてこの孝子伝と前述の順序のほぼ一致するものに論衡（吉驗篇）の記述があるが、ここに見える如き舜が歴山に於ける豊作を得たこと、瞽叟がその悪業の為に盲目になること、また舜の孝心によつて盲眼が開かれること等の記述は見られない

と孟子、史記との異同を具体的に指摘された、史記型のそれは、史記の乙句により切り離され、ほを起点として、重出する b（は）を数え、い（丙句を含む）、ろ、へと辿つたものなのである。ところが、乙句が前へと切り離した、初出の a（は）の方は、

ほ 堯の二女を娶ること

には関わっておらず、そのほに先立つものと解釈される。即ち、司馬遷は、乙句を使って、その前（a。甲句の後）と後（b）とに、はを重出させている訳だが、その理由の一つとして考えられることは、

は 歷山で耕すこと

の話柄に当時、二つの型があったこと、つまり、そのはは、ほから続く孟子のそれ、即ち、史記型のそれと、はは、ほとは関わらず、ほに先立つ、孝子伝型のそれとの、二つの型があったことである。そもそもa（は）を導く、史記の甲句、

常欲^甲殺^甲舜。舜避逃

は、韓詩外伝などの㊦、即ち、大杖で打つ話を受けるもので、舜の物語においてそれが、焚廩掩井などと共に、舜の歷山へ逃げる、原因の一つと推定されることは（舜子変）、前述したが、史記の「舜避逃」は、その結果として、a「舜耕^甲歷山」へ掛かるものとも解釈出来るのである。すると、史記の「舜避逃」は、大杖で打つ話と共にい、ろをも指していた可能性が大きい。おそらく司馬遷は、は（a、b）を重出させたものの、い、ろのそれを避け、孟子万章の記述へと譲ったものであろう。い、ろが、はに先立つ、孝子伝型の舜の物語が漢代に既に存したことは前掲、列女伝と新序の話柄順から知られることである（い、ろ、は

へc、へ）。また、い、ろがほ、へに先立つ例としては、西野氏が、「孝子伝と前述のほぼ一致するもの」とされた後漢、王充の論衡を上げることが出来る。論衡二吉驗の本文を示せば、次の通りである。

舜未^レ逢^レ堯、鰥在^ニ側陋。瞽瞍与^レ象、謀欲^レ殺^レ之。使^ニ之完^ニ廩、火燔^ニ其下。令^ニ之浚^ニ井、土掩^ニ其上。舜得^レ下^ニ廩、不^レ被^ニ火災。穿^ニ井旁出、不^レ触^ニ土害。堯聞微用、試^ニ之於職、官治職脩、事無^ニ廢乱。使^ニ入^ニ大麓之野、虎狼不^レ搏、蝮蛇不^レ噬、逢^ニ烈風疾雨、行不^レ迷惑。夫人欲^レ殺^レ之、不^レ能害、之^ニ毒螫之野、禽虫不^レ能傷。卒受^ニ帝命、踐^ニ天子祚。

論衡は、は（また、に、ほ）を記さない（同二十六知実にも、「瞽瞍与^レ象、使^ニ舜治廩浚^ニ井、意欲^レ殺^レ舜」と見える）。しかし、冒頭に、「舜未^レ逢^レ堯、鰥在^ニ側陋」とあつて（鰥は、妻のない男性、やもお）、い、ろが配されているから、それがほ堯の二女を娶ることを最初に置く、史記型でなく、ほ、へを大団円とする、孝子伝型に属することは明らかである。また、論衡は、舜に対する迫害を、「謀欲^レ殺^レ之」（瞽瞍、象）、「夫人欲^レ殺^レ之」（「之^ニ毒螫之野」とするのが珍しい）などと書き分けていることが、史記と共通することも注目されるが、ともあれ、後漢の王充（二七—一〇一？）以前に、孝子伝型の舜の物語があったこと

は、確実と言えるだろう。

史記が甲、乙句を使つて、韓詩外伝などの甲、乙を切り離すと共に、

は歴山で耕すこと

をa、bの二度に互つて甲、乙句へと記し分けていることは、大変興味深いことである。史記の舜の物語においてa、bを始めとする、幾つかの記述が重出するのは、司馬遷の用いた資料が複数存し、それらを組合わせて一書とするに際し、記述の重複を厭わなかったことが考えられるが、殊にa（は）が、舜の堯に見出だされる以前（即ち、ほ以前）のことと解釈されることは、司馬遷の時代に、は↓ほの順序を持つ、舜の物語が既にあったことを示し、また、論衡が、孝子伝と同じ、い↓ろ↓へ（ほ）の順序を持つことは、前述の如く、これらのことは共に、例えばい↓ろ↓は↓ほ↓へなど、孝子伝型の舜の物語の成立が、早く漢代へと溯る、証拠と見做すことが出来る。さて、そこで浮き彫りとなる問題は、件のは歴山で耕すことから導かれ、継子譚としての物語後半の眼目を成す、

に易米、開眼

の成立の問題である。

六

史記が、甲「常欲殺舜」、乙「皆欲殺舜」句を用いて、一つの話柄を切り離し、且つ、それらの句毎にまた、新たな話柄としての纏まりを与えていることは、非常に興味深い事象と言える。何故なら、同じ事象が越絶書でも起きており、それらの話柄の内容を、改めて検討することによつて、極めて難解な、越絶書本文に対し、今一步踏み込んだ解釈が可能となるからである。

さて、越絶書の「舜有不孝之行」段を眺めると、

(1) 母常殺舜

(2) 瞽瞍欲殺舜

(3) 常欲殺舜（瞽瞍、母）

の三箇所に、史記の甲、乙句と酷似する句が用いられ、それぞれに話柄が記し分けられている。それら(1)、(2)、(3)句は、何を言おうとするものなのか。まず(1)、(2)句は、当段冒頭の「舜有不孝之行」を受けて、

此舜有不孝之行（(2)句末）

ということを言おうとするものである。さらに(3)句は、続く「舜用其仇而王天下者」を受ける、

遂以天下伝之。此为王天下。仇者、舜後母也

(3)句末

ということを言おうとするものである。即ち、(1)、(2)は、

「舜有_二不孝之行_一」を言うものだが、主語に注目すると、

その内の(1)は、仮母が舜を殺そうとしたため、舜が歷山に去ったことを言い、また、(2)は、瞽瞍が舜を殺そうとしたものの果せず、舜が何時も瞽瞍の側に居たことを言っている。(2)句の記す文言が、

舜為_二瞽瞍子_一也。瞽瞍欲_レ殺_レ舜、未_レ嘗_レ可_レ得_三。呼_レ而使_レ之、未_レ嘗_レ不_レ在_レ側

とする通り、韓詩外伝の㉔3、4の3、4を転倒させたものであることは、前述した。加えて、越絶書(2)句の記すそれが、韓詩外伝㉔2「大杖則逃」を省いていることに注目すべきである(㉔1「小箠則待_レ答」も省かれる)。その㉔2が孝子伝に備わっていた可能性のあることも、既述の如くだが、その越絶書は、㉔2の、舜が父の大杖から逃げたという、話柄を省き避けて、(2)句以下の㉔4、3は結局、瞽瞍が舜を殺そうとしても果せず、舜を呼べば、舜は常に側に居たと述べている点に注意すべきである。つまり(2)句以下は、舜が孝行であったとしているのであり、㉔1、2の省略も、舜に非のあったことへの言及を、嫌った結果と見られ、続く「此舜有_二不孝之行_一」とは照応していない。このことから、その「此舜有_二不孝之行_一」は、(2)句「瞽瞍欲_レ殺_レ舜」以下を指すのではなく、(1)句「母常殺_レ舜」以

下、取り分け舜が歷山に去ったことを指すものと考えなければならぬ。次いで、越絶書は、

舜用_二其仇_一而王_二天下_一者、言

として、恰も新たに段を起こすが如く、当句の解釈に関しては後述するとして、続く(3)「常欲_レ殺_レ舜」の内容を見よう。(1)、(2)句の話柄と、(3)句のそれとの繋がりとは、一体どのような関係になっているのか。(3)句は、前掲二句の説明として、

言舜父瞽瞍、用_二其後妻_一、常欲_レ殺_レ舜⁽³⁾

とされ、(1)「母常殺_レ舜」、(2)「瞽瞍欲_レ殺_レ舜」句における母(仮母)、瞽瞍という、主語の違う理由を、まず明らかにするものである。即ち、仮母が舜を殺そうとし(1)句)、瞽瞍が舜を殺そうとした(2)句)という、二通りの記述が生じた理由は、瞽瞍が後妻(の言)を用いたためだ、と言っている。さて、その越絶書の、

言舜父瞽瞍、用_二其後妻_一、常欲_レ殺_レ舜

なる文言が、明らかに孝子伝の、

- ・ 其父瞽瞍……用_二後婦之言_一、而欲_レ殺_レ舜(陽明本)
- ・ 其父瞽瞍……爰用_二後婦言_一、欲_レ殺_レ聖子(船橋本)
- ・ 父名_二鼓叟_一……後母疾_レ之、語_レ叟曰、与_レ我殺_レ舜。叟用_二後妻之言_一(成安注所引逸名孝子伝)
- ・ 父名_二瞽瞍_一……後母嫉_レ之、語_レ瞽瞍曰、為_レ我殺_レ舜。

叟用「妻言」(事森P二六二一)

等に拠ると見られることは、非常に重要な事実であるが、ともあれ、越絶書(3)句以下は、

舜父瞽瞍、用「其後妻」、常欲殺舜

という状況にも関わらず、(2)句以下と同様、

舜不為「失孝行」

と結論し(このことも、(2)句末「此舜有不孝之行」と矛盾している)、続けて、

天下称之。堯聞「其賢」、遂以「天下」伝之

と述べるのであり、その「堯聞「其賢」、遂以「天下」伝之」を受けて、

此為「王天下」。仇者、舜後母也

と結ばれる訳で、その結びの文言「為「王天下」」「仇者」は、(3)句の段の冒頭、

舜用「其仇」而王「天下」者

を指すことが明らかだから、当段(「舜用「其仇」以下)

は、「舜父瞽瞍、用「其後妻」、常欲殺舜」という状況にも関わらず、「舜不為「失孝行」、だから、「天下称之。堯

聞「其賢」、遂以「天下」伝之」と結論するものと解される。

即ち、当段は、後妻に唆された瞽瞍も、後妻も、舜を殺そうとしたが、舜は孝行を止めず、天下がその孝を称え、堯もその賢を認めて、天下を舜に譲ったことを言う。すると、

当段は、先に言う、父や後母が舜を殺そうとし、ために舜

に「不孝之行」があつて、舜が天下を譲られた訳ではなく

(1)、(2)句以下)、舜に害を及ぼそうとする、後妻の所為

(「仇」の故に、舜は堯から天下を譲られたことを(3)句

以下)、言おうとするものと考えられる。そして、当段

(3)句以下)のその結論は、「舜有不孝之行」段(1)句

以下)に言う、後母が舜を殺そうとしたため、舜が歴山に

去ったことと、対応するものと見られるだろう。さらに(1)

句以下については、舜が歴山に去った結果、「父母皆飢」

ことになるが、そこに、

舜求「為「変」心易」志

とされることに注意すべく、このことは、舜の歴山に去つ

た一件が、やはり舜の孝を意味しこそすれ、決して不孝を

意味するものではないことは後述する。これらのことから、

(1)、(2)、(3)句以下、即ち、「舜有不孝之行」全段は、い

ずれも舜の孝を明らかにするもので、舜の不孝を述べるも

のではない。この事実は、「舜有不孝之行」を見出しと

する、(1)、(2)、(3)句以下の全段が、意外にもその見出しの

否定を内容とするもので、それらの内容は、「舜有不孝之

行」には収束せず、(3)句を含む、

舜用「其仇」而王「天下」

及び、

堯聞「其賢」、遂以「天下」伝之。此為「王天下」。仇者、舜後母也

へと収束することを意味する。そして、そのことは、越絶書本文の二つの段の見出し、

・堯有「不慈之名」

・舜有「不孝之行」

の關係について、改めて考えさせずにはおかないものがある。例えばそれら二つの段を含む、越絶書本文の主題とは、一体何なのか。主題ということならば、これまで、右の二つの段の見出し、

・堯有「不慈之名」

・舜有「不孝之行」

こそが、越絶書のそれであると考えて来た。そして、二つの段の主題はそれぞれ、「舜有「不孝之行」」段の結び（また、(3)句以下の結び）、

堯聞「其賢」、遂以「天下」伝之

を結論するものと解釈して来たのである。しかし、改めて考えてみるに、「堯有「不慈之名」」の故に、「遂以「天下」伝之」はともかくとして、「舜有「不孝之行」」の故に、「遂以「天下」伝之」というのは、どうにも落ち着きが悪く、余りにも不自然である。常識から見て、堯舜は、儒教の聖天子とされる。儒教は、禅譲を認めるから、堯の不肖の子に対

する不慈は、或る意味で、致し方ない側面を有しよう。一方、儒教は、孝を絶対視している。堯より禅譲を受け、聖天子となる舜が、然るべき理由もあり、例え一時的にせよ、親に対する「不孝之行」があったと言うことは、尋常ならざる問題を惹き起すであろう。まして、武梁祠の制作された後漢時代は、過礼が流行し、孝により敏感であった時期で、そのような問題の見過越される時代ではない。そして、越絶書もまた、「舜有「不孝之行」」なる不穩極まる世評を、肯定的にそのまま主題化したとは、一寸想定し難い。ここに、

・堯有「不慈之名」

・舜有「不孝之行」

の二つの見出しを、越絶書本文の主題と見立てることには、疑いが残る。そこで、越絶書本文を再度、通読すると、

堯有「不慈之名」

の段の末尾にも、

退「丹朱」而以「天下」伝「舜」

の文言が記され、

舜有「不孝之行」

の段の末尾にも、

堯聞「其賢」、遂以「天下」伝之

の文言があつて、同じ文言が——線部に、繰り返し録され

ている現象に気付く。このことは、越絶書本文の主題を、二つの見出しと捉えることの誤りを示すと共に、その主題は、——線部の堯が、

以_三天下_一伝_レ舜_レ(之)

ということに外ならず、

・堯有_三不慈之名_一

・舜有_三不孝之行_一

の二つの見出しは、主題(——線部「以_三天下_一伝_レ舜_レ(之)」に付随する、副次的なテーマに過ぎないことを示すものである。そして、「舜有_三不孝之行_一」の段に言う、前述(1)、(2)、(3)句以下の内容は、瞽瞍が舜を殺そうとしたこと(2)句以下)でなく、仮母が殺そうとしたこと(1)句以下)に比定され、さらに「舜有_三不孝之行_一」が、「舜用_三其仇_一而王_三天下_一」と言い替えられていることに思い到るのである。「舜有_三不孝之行_一」段が、このように複雑で分かりにくい構成を取るのには、「舜有_三不孝之行_一」なる副次的テーマに関し、一つにそれを否定し(1)句以下に、「舜求_レ為_三変_レ心易_三志_一」とあり、(2)句以下に、瞽瞍が「呼而使_レ之、未_レ嘗不在_レ側」)とあり(ここで韓詩外伝等の大杖の話の省かれた理由も、判然とする)、(3)句以下に、「舜不_レ為_三失_レ孝行_一」とある)、一つにそれを、「舜用_三其仇_一而王_三天下_一」)と言い替えている点が上げられる。さらに、「舜有_三不孝之

行_一」の見出しではなく、その言い替えの「舜用_三其仇_一而王_三天下_一」の方が、主題としての「以_三天下_一伝_レ舜_レ(之)」に結び付くことは、末尾の文言に、

堯聞_三其賢_一、遂以_三天下_一伝_レ之。此為_三王_三天下_一」

と見える、——線部と~~~~線部との関係が、そのことをよく表わしている。かくて、越絶書本文の内容は、堯が舜に天下を伝えたことを主題とし、それをめぐる二つの世評、

・堯有_三不慈之名_一

・舜有_三不孝之行_一

を話題とするもので、世評の前者は肯定されるが、後者は否定され(1)、(2)句以下)、後者はさらに、

舜用_三其仇_一而王_三天下_一」

と言い替えられた上、「舜不_レ為_三失_レ孝行_一」いうことを、確認するものであったことが判明する。即ち、舜が不孝であったことはないとするのである。

ところで、越絶書は、「舜有_三不孝之行_一」の世評を否定し、誤解であることを明らかにするが、その誤解の淵源が、(1)句以下に、

舜去耕_三歷山_一、三年大熟。身自外養、父母皆飢

と言う、舜が歴山に去って耕し、「身自外養_{みずから}」たことにあるのは、ほぼ間違いない。さらに右記が、武梁祠帝舜図の題記、

帝舜名重華、耕_ニ於_ニ歷山_、外養三年

の典拠と見られることは、前述の通りだが、越絶書の言う誤解は、右記の「身自外養」の「外養」を、舜が歷山に去り、「家（瞽瞍）を捨てて一人で生活した」意味に取ることから生じている。その結果、「父母皆飢」ということになり、家（瞽瞍）を捨てた舜の行動が、「不孝之行」とされるのである。このことから、越絶書に言う誤解の淵源は、「外養」の右の解釈にあると見られよう。さて、「家を離れて生活する」という「外養」の解釈を、誤解であるとする越絶書の主張については、そのことを支持する、興味深い資料が一、二存在する。その一つは、大戴礼記四、曾子事父母五十三である。その本文を示せば、次の通りである（末尾に書き下しを添える）。

单居離問曰、事_レ兄有_レ道乎。曾子曰、有。尊_ニ事_ニ之_、以爲_ニ己望_、也。兄_ニ事_ニ之_、不_レ遺_ニ其言_、兄之行若_ニ中_レ道、則兄_ニ事_ニ之_、兄之行若不_レ中_レ道、則養_レ之。養_ニ之内_、不_レ養_ニ於外_、則是越_レ之也。養_ニ之外_、不_レ養_ニ於内_、則是疏_レ之也。是故君子内外養_レ之也。

（单居離問いて曰わく、兄に事うるに道有りやと。曾子曰わく、有り。之に尊び事え以て己が望みと爲す也。之に兄とし事えて其の言を遺さず。兄の行い若し道に中らば、則ち之に兄として事え、兄の行い若し道

に中らざば、則ち之を養う。之を内に養え外に養えざば、則ち之を越す也。之を外に養え内に養えざば、則ち之を疏んずる也。是の故に君子は内外に之を養うる也と）

曾子の話は、兄に対する、弟のあり方を述べたもので、特に兄の行いが道から外れた場合の弟のそのの中に、「不養_ニ於外_、」養_ニ之外_、」などの用例が見え、それらの養は、憂れえる意であり、憂れえを外に向かつてはつきりと示すことである。その意は、詩経邶風「二子乗舟」に、「中心養_ニ養_、」の句があり、「養養」の毛伝に、「養養然、憂不_レ知_ニ所_レ定_、」とされることに基づくが、大戴礼記の後周、盧弁注には、「養猶隱_レ之_、」とも見え、隠には、憂れえる、傷む意味もある。また、莊子外篇達生も、興味深い資料とすべきである。その本文を示せば、次の通りである。

田開之曰、魯有_ニ单豹者_、巖居而水飲、不_レ与_ニ民共_ニ利_、行年七十而猶有_ニ嬰兒之色_、不幸遇_ニ餓虎_、餓虎殺而食_レ之。有_ニ張毅者_、高門鼎薄、無_レ不_レ走也。行年四十而有_ニ内熱之病_、以死。豹養_ニ其内_、而虎食_ニ其外_、毅養_ニ其外_、而病攻_ニ其内_、……仲尼曰、無_ニ入而蔵_、無_ニ出而陽_、柴立中央。

（田開之曰わく、魯に单豹なる者有り。巖居して水飲し、民と利を共にせず。行年七十にして猶お嬰兒の色

有り。不幸にして餓虎に遇う。餓虎殺して之を食う。

張毅なる者有り。高門こうもん鼎薄、走かざる無き也。行年四十にして内熱の病有りて以て死す。豹は其の内を養いて、虎其の外を食ひ、毅は其の外を養いて、病い其の内を攻む……仲尼曰わく、入りて蔵す無く、出でて陽あうわす無し。中央に柴立さいりつすと

この単豹、張毅の話は、呂氏春秋十四必己、淮南子十八人間訓（豹養其内……毅脩其外」と記す）などに見え、また、顔氏家訓五、養生十五にも引かれる。顔氏家訓の本文を示せば、次の通りである。

單豹養於内而喪外、張毅養於外而喪内、前賢所戒也。

（單豹は内に養いて外を喪い、張毅は外に養いて内を喪う、前賢の戒むる所也）

莊子（顔氏家訓）の「外」／「内」には文字通り、外的／内的の他、明示的／暗示的、可視的／不可視的、社会的／個人的などの意味がある。また、莊子には、「養其外」（顔子家訓「養於外」）等の用例が見え、それらの養はやはり、憂れえる、氣に掛ける意に取れる。特に面白いのは、莊子末尾の仲尼の言に單豹、張毅の行動を評して、

仲尼曰、無入而蔵、無出而陽

とされることで、張毅の外養（「養其外」）「養於外」

「養之外」が出でて陽あうわすこと、單豹の内養（「養其内」）「養於内」「養之内」が入りて蔵かくすこととされている。

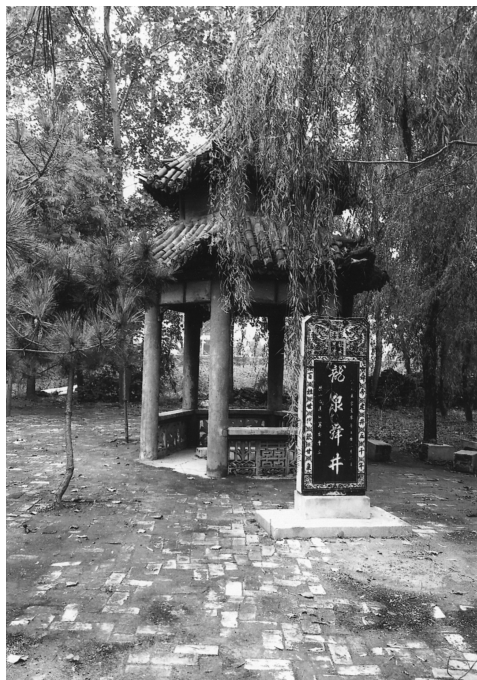
このことは、越絶書、武梁祠題記の「外養」が、憂れえを外に表わすことを、示すものである。すると、越絶書(1)句（母常殺舜）以下は、仮母が舜を殺そうとしたので、舜は歴山に去つて、自ら憂れえを表わした、という意味に解釈される。そして、その意を踏まえるならば、続く、

「舜父頑、母嚚、兄狂、弟敖」にも関わらず、

舜求為変心易志

と記されることは、舜の表わした憂れえの真意を述べるものとして、意味がよく通る。

さて、舜は、歴山に去つて耕すことで、自らの憂れえを表明したが、舜の田はよく実り、父母達は飢える。世間は、そのような舜の振舞を、「不孝之行」と評し、越絶書は、その評を誤解として否定しようとする。そして、世間に誤解を招いた舜の振舞とは、舜が歴山に去つたことに外ならない。だから、舜が不孝とされる理由の一つは、舜が歴山に去つたことに求められよう。取り分け、舜が歴山に去つたことが、父の瞽瞍ないし、家から逃げたことになるか、どうかが焦点である。例えば舜の伝説の発祥の地、山東には幾つかの歴山がある。中で、有力なものとして前述、濟南市の歴山（千佛山）を上げることが出来、孟子万章以来



图三 舜井（上）、歷山址（下。菏泽市鄆城縣）

の舜井を伴っている。その舜井は、瞽瞍の家のあった所だから、例えば歴山と舜井との距離を計ってみると、直線距離にして約三キロ、道を辿ると五キロ前後に及ぶので、舜が済南の歴山に去ったとすると、舜は、父の瞽瞍ないし、家から逃げるイメージが強い。加えて、舜は、瞽瞍から数キロも離れてしまうので、

瞽瞍……呼而使_レ之、未_レ嘗不_レ在_レ側（越絶書）

などということは到底、不可能とせざるを得ず、舜を不孝と見做す印象が、そこに萌すだろう。ところが、伝説の山歴山の有力な候補は、濮州（旧濮県。現荷沢市鄆城県）にも存し、やはり舜井を伴う。図三下に掲げるのが、その歴山址で、すぐ南に舜井がある（図三上。鄆城県門什鎮歴山廟村）。元の歴山は、黄河の氾濫により、現在の地下数メートルの所に埋もれてしまったと言い、今は綿畑となっている。注目されるのは、歴山と舜井の近さで（図三上、舜井の井亭の柱の間に、下の歴山址が見えている）、その距離は文字通り、指呼の間とすべく、もし瞽瞍が舜を呼んだなら、舜は、直ちに応えられたと思われる。すると、歴山は、瞽瞍の家の単なる裏山に過ぎない訳で、舜が歴山に去ったにせよ、それは、父の家から遠くへ逃げるというより、殺意を抱き続ける仮母の眼を逃がれ、舜が一時的に家の裏山へ避難しただけのことと取れる。当地の歴山址が無視し



図四 姚墟址（荷沢市鄆城県）

難いのは、舜の生地とされる姚墟（図四。閭什鎮姚劉庄村）とか、雷沢（菏泽市牡丹区北）などが、近くに散在すること、舜の伝説形成の往時を、偲ばせるに足るものがあるためである。ともあれ、図三は、件の越絶書本文の解釈に、新たな視野を拓く点、伝説を追う現地調査と古典研究との関わりをめぐる、今後の課題を提供する好例と言える。因みに、図三に見る舜井と歴山址との近さは、継子譚

としての舜の物語において、至孝の舜を殺そうとした、瞽瞍達の受ける、恐ろしい報い（例えば三教指帰成安注所引逸名孝子伝に、「父……両眼失明、亦母頑愚、弟復失_レ音」とある。敦煌本孝子伝〈事森〉も同じ。纂図附音本注千字文には、「其父両目即盲、母便耳聾、弟遂口噤」とする）と、その許し（成安注所引に、「〔父〕両目即開、母亦聡_レ耳、弟復能言」〈事森も略同〉、注千字文に、「〔父〕即開朗明、母亦能听_レ声、象即便能語」とする）とが何故、必要とされたのか、特に父、継母、弟が盲、聾（頑愚）、啞という形式の報いを、受けさせられる理由を考えさせるものがあるが、このことは、また機会を改めて述べよう。かくて、越絶書を踏まえる武梁祠帝舜図の題記「帝舜名重華、耕_二於歴山、外養三年_一」は、舜は歴山に耕作して三年間、

親に孝を尽くしつつ、継母の非を憂れ示した、という風に解釈される。そこには、「舜有_二不孝之行_一」と評される、

観念の入る余地はない。

最後に指摘しておきたいのが、孝子伝研究における、越絶書本文の意義である。越絶書は、極めて難解な書物ながら、その資料的価値は、計り知れず高い。例えば越絶書本文が孝子伝本文を踏まえようことは、先にも触れた。中で、孝子伝の舜の物語における、

に易米、開眼

の話柄については、漢代以前の存在を証する資料が存在しない。ところが、越絶書本文に、

舜去耕_二歴山、三年大熟。身自外養、父母皆飢

と記し、舜の耕作したもののみが大いに実って、「父母皆飢」とされることは、孝子伝のに易米、開眼を前提としなければ、解釈し難い文言となっている。そして、上記の越絶書本文こそは、そのに易米、開眼の漢代以前成立を示す、殆ど唯一の資料と見られるのである。このことは、武梁祠の十帝図として描かれた帝舜図が、和林格爾後漢壁画墓においては、孝子伝図劈頭の舜図として描かれる、事情の一端を、具体的に窺わせるものである。漢代以前の舜の物語に関しては、今後なお検討すべき課題が多い。

付記 歴山址、舜井を教示、案内下さった鄆城県文物管理所所長、

路維民氏に対し、心から御礼申し上げたい。なお小稿は、平

成27年度科学研究費基盤研究(B)、同佛教大学特別展開研究費による成果の一部である。

注

- ① 拙著『孝子伝図の研究』（汲古書院、平成19年）Ⅰ一参照。
- ② 拙著『孝子伝の研究』（佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年）Ⅰ四参照。
- ③ 注①前掲拙著Ⅱ一「重華賛語」参照。
- ④ 寧夏固原北魏墓漆棺画の孝子伝図については、寧夏ウイグル自治区文物考古研究所の要請による、拙稿を準備する。
- ⑤ 注②前掲拙著Ⅲ二「重華外伝―注好選と孝子伝―」参照。
- ⑥ 注②前掲拙著Ⅰ二2参照。また、当該墓の全図像は、中国内蒙古自治区文物考古研究所、日本幼学会『和林格爾漢墓壁画孝子伝図輯録』（二〇〇六―二〇〇八年度日本科学研究会資助項目、二〇〇九年）及び、中国内蒙古自治区文物考古研究所、日本幼学会、中国内蒙古博物院『和林格爾漢墓壁画孝子伝図摸写図輯録』（二〇一〇―二〇一二年度日本科学研究会資助項目、二〇一四年）に取められる。
- ⑦ 劉向孝子伝と伝えるものの逸文が、法苑珠林四十九などに載るが、六朝の仮託である。西野貞治氏『陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について』（『人文研究』7・6、昭和31年7月）に詳しい。
- ⑧ 村上英二氏蔵後漢孝子伝図画像鏡については、注①前掲拙著口絵及び、Ⅰ二2、Ⅱ一1を参照された。
- ⑨ 注①前掲拙著Ⅰ二2参照。
- ⑩ 後漢武氏祠画像石左右室七石に、舜の図があるとされる。賈慶超氏『武氏祠漢画石刻考評』（山東大学出版社、一九九三

年）139頁、蔣英炬、吳文祺氏『漢代武氏墓群石刻研究』（山東美術出版社、一九九五年）五章376、77頁。注①前掲拙著Ⅱ二2、図六―図十二参照。

⑪ 図一は、容庚『漢武梁祠画像錄』（考古学社專集13、北平燕京大学考古学社、民国25（一九三六）年）3丁に拠る。

⑫ 蔣、吳氏注⑩前掲書五章一

⑬ 長廣敏雄氏編『漢代画像の研究』（中央公論美術出版、昭和40年）二部「武梁石室画像の図象学的解説」66頁（執筆者は、杉本憲司氏）。蔣、吳氏注⑩前掲書五章一（83頁注⑩）も同じ。

⑭ 青木正児氏『堯舜伝説の構成』（『青木正児全集2（春秋社、昭和45年）所収。初出昭和2年）に詳しい。

⑮ 注①前掲拙著Ⅱ一1（初出平成16年）。越絶書のこととは、陳泳超氏『堯舜伝説研究』（南京師範大学出版社、二〇〇〇年）七章三節（27頁）にも指摘がある。

⑯ 近時の研究として、李步嘉氏『越絶書校釈』（武漢大学出版社、一九九二年。中華書局、二〇一三年）、張仲清氏『越絶書校注』（国家図書館出版社、二〇〇九年）、同氏『越絶書訳注』（人民出版社、二〇〇九年）、龔紀東氏『越絶書全訳』（貴州人民出版社、一九九六年）、李步嘉氏『越絶書』研究（上海古籍出版社、二〇〇三年）などがある。

⑰ 長廣氏注⑬前掲書66頁

⑱ 注①前掲拙著Ⅱ一1参照。

⑲ 青木氏注⑭前掲論文

⑳ 李氏注⑯前掲書（武漢大学出版社版89、90頁）

㉑ 陽明本孝子伝の本文は、幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15年）に拠る。

㉒ 拙稿『陽明本孝子伝の成立』（『京都語文』14、平成19年11

月)参照。

②③ 注①前掲拙著Ⅱ一1参照。

②④ 青木氏注⑭前掲論文

②⑤ 列女伝の本文は、山崎純一氏『列女伝』上(新編漢文選、明治書院、平成8年)に拠る。

②⑥ 増田欣氏「虞舜至孝説話の伝承―太平記を中心に―」(『中世文芸』22、昭和36年8月。後、増田欣氏『『太平記』の比較文学的研究』(角川書店、昭和51年)一章二節に、補筆の上再録)。西野氏注⑦前掲論文にも、同様の指摘がある。

②⑦ この辺りの現行の史記本文には、問題がある。その一端については例えば、新釈漢文大系38『史記』一本紀(明治書院、昭和48年)の吉田賢抗氏による「余説」(54頁)を参照されたい。

②⑧ 青木氏注⑭前掲論文

②⑨ 大谷邦彦氏「『孟子』における舜説話」(『中国古典研究』14、昭和41年12月)

③⑩ 西野氏注⑦前掲論文

③⑪ 孔子ではなく、孟子の語とする異伝がある(五代、邱光庭の兼明書三「曾子侍」。その本文を示せば、次の通りである。

或曰、何知曾参之父_レ嚴者。荅曰、孟子云、曾参之事父也、訓_レ之以小杖則受、論_レ之以大杖則走者。恐_レ虧其体非孝之道。常鋤瓜誤傷_レ蔓、乃以_レ大杖_レ段_レ之、是其_レ嚴也。

兼明書は、——線部も曾子のこととしている。なお南宋、洪邁の容齋三筆十二「曾皙待_レ子不_レ慈」にも、「伝記所_レ載」として、このことを引き、「予切疑_レ無_レ此事、殆戦国時学者妄_レ為_レ之辞」と述べている。

③⑫ 曾子の話については、注①前掲拙著Ⅱ一1、また、三彩四孝塔式缶については、注②前掲拙著口絵及び、Ⅱ二参照。

③⑬ 注①前掲拙著Ⅱ一1参照。

③⑭ 入矢義高氏訳『舜子変』(同氏編『仏教文学集』変文所収、中国古典文学大系60、平凡社、昭和50年)注二(133、134頁)。

因みに、陽明本、船橋本孝子伝35伯奇条にも、継母が態と蜂を袖に入れ、それを伯奇に取らせて、その痴態を父に見せ付けようとする、蜂の話の見えることが興味深い(注①前掲拙著Ⅱ二2参照)。

③⑮ 訳文は、入矢氏注⑭前掲書に拠る。

③⑯ 図二は、C.T.Loo & Co, An Exhibition of Chinese Stone Sculptures (New York, 1940) Plate XXXI (Catalogue No. 36)に拠る。

③⑰ 林聖智氏の説による。詳しくは、注①前掲拙著Ⅱ二3を参照されたい。

③⑱ 小川環樹、木田章義氏『注解千字文』(岩波書店、昭和59年後、平成9年に岩波文庫青220-1として再刊)の訳文に拠る。なお纂図附音本注千字文には、**は**に先立つ、**ろ**掩井において、「錢五百」を与える隣家の親友に対し、舜は、

舜曰、我只可_レ順_レ父母_二而死_レ為_レ孝。不_レ可_レ逆_レ父母_二而走_レ為_レ孝_上。

と述べており、右によれば、件の題記は、

舜子謝_レ父母_二不_レ死

とも解せないことはない。

③⑲ 前述の如く、成安注所引逸名孝子伝は、**は**の山名を欠く他、大団円の、

は堯の二女を娶ること

へ帝位を譲られること

の二条も欠くが、末尾に、「史記云」として史記を引き、へを補っている。また、陽明本によると思しい、普通唱導集上末には、

舜帝重花、至孝也。瞽瞍頑愚、不列賢聖。用後婦之意、而欲殺舜。便使上屋、於下燒之。舜乃飛下、供養如故。又使澹井、殺舜。々已密知、帶銀錢五百文、作傍穴。父果以大石填之。舜乃從東家井出。因歿歷山、以躬耕種穀。天下大早、民無取者、唯舜種者大豐。其父填井之後、兩眼精盲。至市就舜糴米、舜乃以錢還米中。如是非一。父疑是重花。借人看朽井、子無所見。又糴米、对在舜前。論賈未畢、父曰、君是何人、見給墻。時非我子重花乎。舜是也。即來父前、相抱号泣。舜以衣拭兩眼、即開明。所謂為孝子之至。堯聞之、妻以二女、授之天子位。史記第一云、虞舜名重花。舜父瞽瞍頑、母嚚、弟象敖。皆欲殺舜。々順適不失子道。兄弟孝道。欲殺不可得。即求常在。とあり（——線部に金銭のプロットが見える）、やはり末尾に、「史記第一云」として、史記の乙、乙以下を引くことは、早くに失われた大団円の②句を、史記によって補おうとしたものかも知れない。なお金沢文庫本、東大寺北林院本言泉集、亡父「虞舜」には、「史記第一云」とする、史記乙、乙句以下のみが引かれる（真如藏本言泉集、亡父「虞舜」は、「報恩伝云」とする、舜の物語に続いてへ金銭のプロットがある、「史記第一云」とする当該句が引かれている）。

④① 西野氏注⑦前掲論文

④② 注②前掲拙稿参照。